

愛媛県歴史文化博物館

研究紀要

第九号

二〇〇四年

資料紹介

「伊予国松山在勤中并道中往返日記」

井上 淳

はじめに

本資料は当館が平成十三年度に東京の古書店から購入したもので、表紙の題箋には「伊予国松山在勤中并道中往返日記」（以下、「日記」とある。「日記」が記されている期間は、筆者が江戸を出発した天明元（一七八一）年五月十六日から、松山に勤務して江戸に戻る天明二年四月十九日までの約一年に及ぶ。四七丁からなる縦十四・九m、横二〇・九mの小横帳は小さな文字で埋めつくされており、書き損じもほとんどないことから、「日記」は日々書き記したものでなく、後にまとめられたものであることが分かる。

筆者は伊予松山藩に仕えた人物であることは題箋からも明らかであるが、天明元年当時の藩主は松平定国である。定国は宝曆七（一七五七）年に徳川吉宗の次男で御三卿の一つ田安宗武の子に生まれ、明和五（一七六八）年に八代藩主定静の嫡養子となり定国の名前を頂戴、安永八（一七七九）年の定静の死により遺領十五万石を継いでいる。「日記」が記された天明元年には、閏五月一日に江戸を出て松山に二五日到着、初めての国入りを果たしている。その後松山で年を越し、天明二年三月十一日に松山を出て四月九日江戸に戻っている。したがって、「日記」は初めての国入りから江戸に戻るまでの定国と、行動をともにした人物により記されたものといえる。

「日記」の筆者については、名前の記述がなく不明という他はない。「日記」を一見すると、写真にもあるように整った書体で整然と記されており、定国付の小姓による日記のようにも思われる。しかし、「日記」を注意深く読んでいくと、筆者は江戸に暮らす両親のことを「おとゝ様」「おかゝ様」と記しており、女性であることは明らかである。また、筆者は定国の「奥附之衆」とも記されていることから、定国に仕える奥女中と考えるのが妥当と思われる。ここでは

そうした前提にたち、第一に奥女中の江戸から松山までの旅の様子、第二に松山滞在中の暮らし、第三に江戸との手紙の遣り取り、第四に松山から江戸までの旅の様子について取り上げ、「日記」の内容を紹介したい。

一、江戸から松山まで

天明元年五月十六日に、奥女中は江戸愛宕下の松山藩上屋敷を出発している。藩主定国が江戸を立ったのは、先にも記した通り閏五月一日であるので、半日程早い出発であった。旅の同行者やその人数は記されていないが、松山に着くまでに、「日記」に登場する名前として、「お元殿」「三嶋殿」「お清殿」という女性の名前が見えることから、同僚の奥女中と「吉右衛門殿初め供之人々」が旅の同行者であったことが分かる。

奥女中がたどったルートを整理してみると、次のようになる。宿泊地には宿泊した日付を付した。

江戸愛宕山 品川 戸塚（五ノ十六） 藤沢（五ノ十七） 大磯（五ノ十八）
箱根湯元 箱根峠（五ノ十九） 沼津 吉原（五ノ二十一）二四） 油井 江
尻（五ノ二五） 丸子 岡部（五ノ二六）二八） 藤枝 日坂（五ノ二九）
袋井 見付（五ノ晦） 浜松 白須賀（閏五ノ一） 御油 岡崎（閏五ノ二）
池鯉（閏五ノ三） 宮（閏五ノ四） 桑名 石薬師（閏五ノ五） 水口（閏
五ノ六） 草津 石山寺 大津（閏五ノ七） 伏見 淀 大坂（閏五ノ九）十）
大坂横町（閏五ノ十一）十二） 安治川（閏五ノ十三）十四） 明石（閏五ノ
十五） 家島（閏五ノ十六） 本島（閏五ノ十七）十八） 下津井 豊島（閏

五ノ十九(二十) 白石 輛(閏五ノ二一) 三津浜

奥女中はまず東海道を進んで行くが、その旅は松山藩の公用の旅であったため、宿泊に各宿場の本陣が利用されている。しかし、場合によっては本陣に泊まることができなかつたり、本陣に泊まるため後戻りするケースも記されている。天明元年五月二五日の宿泊地江尻宿では、智恩院の江戸登りと宿泊が重なったため、奥女中は旅籠屋に泊まっている。本陣と旅籠屋では施設に大きな違いがあつたようで、奥女中は旅籠屋のことを「殊之外宿あしく給へもの等きたなく難儀いたし候」と記している。翌五月二六日には藤枝宿まで来たものの、「土方丹後守様」(菟野藩主土方雄貞)と「細川様」が既に到着し、こみあつていたため、一里程引き返して岡部宿に宿泊している。

旅の行程は徒歩が中心であつたが、雨が降つた場合など、要所には駕籠を用いている。東海道はいくつも川があり、江戸時代の旅人を悩ませたが、奥女中も五月十七日の馬入川(相模川)で早くも川留めに逢っている。十八日には馬入川を船で渡つたものの、今度は徒歩渡しの酒匂川が川留めとなつている。二十日には富士川が川留めで、その後吉原宿に五泊することを余儀なくされている。二六日にも大井川が川留めとなり、岡部宿に三泊した後ようやく川を越えている。閏五月一日には天龍川を船で渡り、舞阪から荒井(新居)までの浜名湖を船で渡り、荒井の関所も無事に通過している。三日には矢作橋が修復中であつたため、矢作川を船で渡っているが、この時には別の奥女中の荷物が濡れるというトラブルも起きている。宮宿から桑名宿までの海上を行く七里の渡しは一日風待ちしただけで、閏五月五日に渡っている。

奥女中の東海道の旅を振り返ると、梅雨時の川に苦しめられた旅であつたが、奥女中は川留めで空いた時間を有効に活用している。藤沢宿では時宗の総本山遊行寺に参詣したり、大磯宿では曾我十郎の愛人虎御前にちなんだ旧跡虎が石を見物したり、七里の船渡しの風待ちでは熱田神宮に参詣したりと、寺社参詣、物見遊山を行っている。奥女中が最も念入りに見物しているのは、閏五月七日の石山寺である。石山寺では折から開帳があり、江戸の中洲の真似らしく瀬田

川の川端にも茶屋ができていて、江戸と比較する視点からその様子を記している。茶屋で働く女性の姿も気になるらしく、自分と大きく違つ「赤まえたれ」姿を見て「すさ間敷」という感想をもらしている。

また、吉原宿では富士の白酒、安倍川餅、佐夜の中山の餅、荒井の浜名湖の鰻、草津宿の目川の菜飯田楽など、土地の名物を楽しんでいる。桑名宿では名古屋の小刀やはさみの行商人から買い求めたほか、水口宿でも行李の行商から買い求めるなど、土地の名産品も購入している。東海道を旅する奥女中の行動は、当時の一般庶民の旅日記と比べても大きくは変わらない。

奥女中は伏見から三十石船に乗り、途中藩主の乗る御座船や淀の水車を見物しながら閏五月九日朝に松山藩大坂屋敷に着いている。天下の台所大坂でも天満(大坂天満宮)、曾根崎天神、住吉大社、生国魂神社などに参詣し、寺町の茶屋で酒を飲んだり、生玉の南蛮うどん屋で蕎麦切りを食べたりと、初めての大坂を満喫している。生玉では女郎や芸者を見かけると、まるで浅草山下みたいだと、ここでも江戸の視点から大坂の町を見ている。

閏五月十一日には大坂屋敷前で川舟に乗り、途中松山から迎えにきた関船に乗り換え、瀬戸内海へと漕ぎ出している。瀬戸内海の船旅は、沿岸の港町や島に寄港しつつゆっくりと進んでいる。十五日に寄港した明石では湯屋を借り切って入湯した後、月の名所ということで仲間たちと俳諧を楽しんでいる。十九日の下津井手前の海上では、金毘羅への初尾として薪に書付をして鳥目を流したとあり、金毘羅信仰を背景とした流し木の習俗も書き留めている。また、下津井沖では生きたままの蛸を漁師から買い求めて、塩を付けて食べたりもしているが、こうしたことも江戸勤めでは経験できない新鮮な体験であつただろう。奥女中は海岸での貝ひろいも楽しみながら、閏五月二二日に松山藩領の三津浜に到着している。

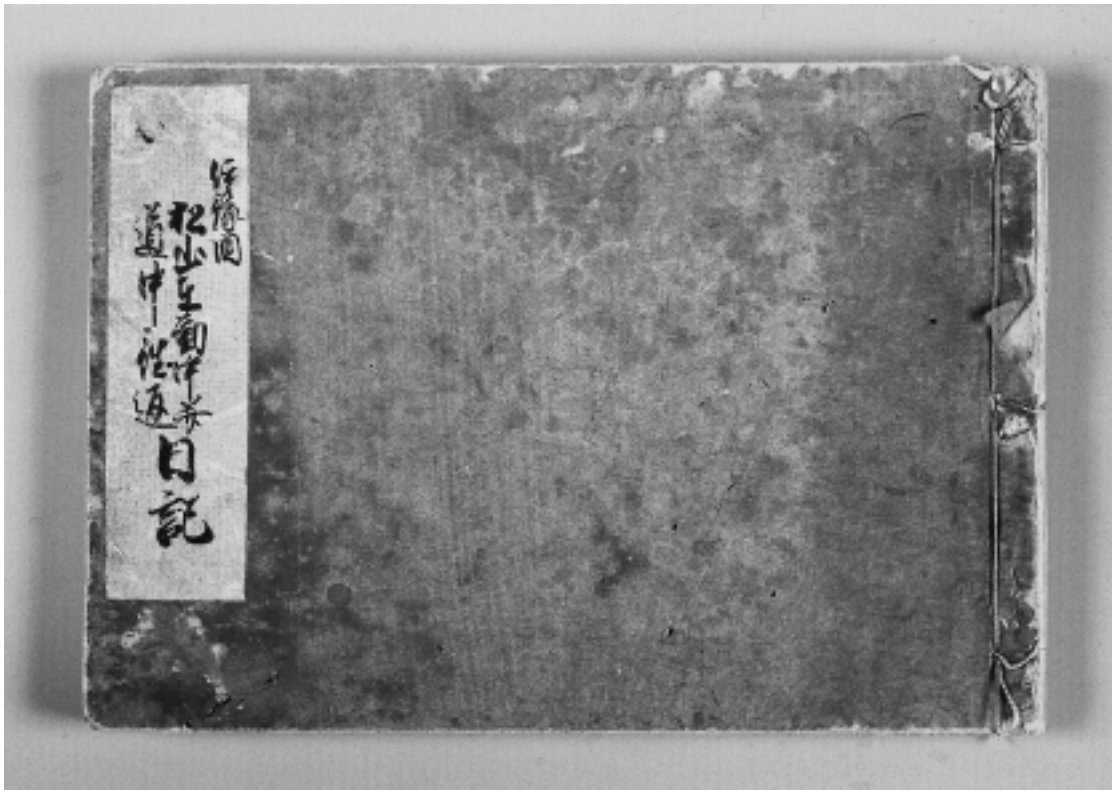


写真1 「伊予国松山在勤中并道中往返日記」(表紙)

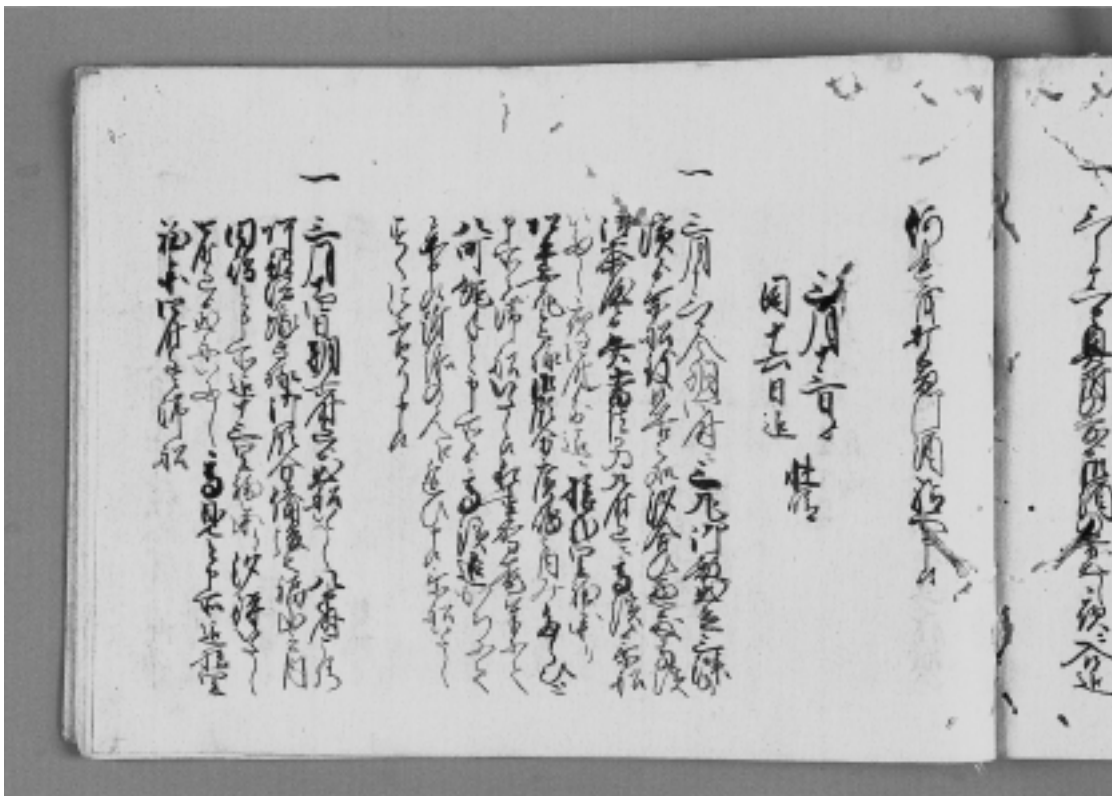


写真2 「伊予国松山在勤中并道中往返日記」(本文)

二、松山での暮らし

天明元年閏五月二三日に奥女中は松山城三の丸御殿に入り、松山での生活をスタートさせている。奥女中は、初めて体験したと思われる長期の旅で疲れたためか、のぼせが強く耳鳴りがするなど体調を崩し、七月には出勤できない日もあった。しかし、九月十九日には薬を休むと記しており、この頃には体調も回復して奥女中としての仕事に落ち着いて取り組みはじめたものと思われる。

ところで、「日記」には、筆者の奥女中としての地位や仕事の具体的な内容が分かる記述が少ない。仕事の記述としては、定国が風邪をひいた時に一晚中寝ないでいたという天明元年十月二十九日の記述と、着物を縫う仕事をする呉服の間の手伝いに出たという天明二年二月三日の記述があげられる程度である。天明元年閏五月二三日に松山に到着した後、筆者は他の奥女中とともに旅の苦労をねぎらったためか、「お友」「おさつ」「御中居」「御末之衆三人」に対して麻芋を遣わしているが、このことから筆者が掃除や炊事などを行う仲居や御末よりは上に位置していることは分かる。いずれにしても、筆者の奥女中としての仕事の内容を確定することは難しいが、松山藩公用飛脚の出立や到着を詳しく書き留めていること、また江戸屋敷の「御右筆間」と頻繁に手紙を交わしていることから、筆者は右筆ではなかったかと考えられる。男性が記したものと見間違えそうな漢字の多い達筆な文字と、要領よくまとまった文章もそのことを裏付けているように思われる。

また、「日記」は定国の側に仕えた奥女中の記録であるだけに、定国の鉄砲打・猪狩・鷹狩などの行動についても記されている。例えば、天明元年九月五日には定国が兜蟹を見物した記事がある。兜蟹は瀬戸内海沿岸から九州北部まで生息しているので、おそらく松山藩領のいずれかの海岸で捕まえて、定国のもとに運ばれたのであろう。筆者も初めて見る生物である兜蟹に興味をもち、大きさが金指で一尺二寸程で、兜の形をしており角が一本あったと「日記」に書き記している。天明元年十二月五日には定国の道後温泉入湯の記事がある。道後温泉では藩主が入湯する時には幕湯といい、幕を張り巡らせて一般の入浴

を停止したが、定国の入湯にあたってそのような措置が採られたものと思われる。定国は武士や僧侶が入る一の湯に、奥女中は女性が入る二の湯に入っている。それ以外にも松山城三の丸御殿で行われた能の記事、三の丸御殿の続きの東山麓にあった西の丸御殿における花見の記事なども散見され、「日記」からは初めての松山でくつろぐ定国の姿が垣間見える。

さらに、「日記」には奥女中が三の丸御殿から外出した際に、松山の様子を書き留めた記事も多く見られる。その事例として松山の祭礼を記した記事と松山藩の東野茶屋に行った記事を取り上げる。

祭礼については、天明元年八月十三日の道後八幡と、八月二十六日の味酒大明神の様子が記されている。道後八幡では鉦が四つ、出し(山車)が一つに、芭蕉の作り物が出て、子供が鬼の面をかぶり太鼓や鉦を打ち鳴らして行列している。そして、神輿が大勢の見物人の中に入り、見物人を追い散らすようにくるくる廻っている。味酒神社についても鉦が四つ、かつぎ屋台が六つ、いろいろな形の作り物が出て、神輿は城に入る一体は狂わせなかったが、城に入らない二体は、道後八幡同様に大勢の見物人の中に入り狂わせたこと記している。奥女中はこうした見物人の中に入る荒っぽい神輿を「所乃風」すなわち松山の風習と書き、自らはなじめなかったのが、「おもしろからず」と感想を書き記している。この道後八幡と味酒八幡の祭礼は、現在でもそれぞれ伊佐爾波神社と阿沼美神社の祭礼として行われている。現在の祭礼はいずれも神輿と神輿を荒々しくぶつけ合う鉢合わせで有名であるが、それは奥女中が「日記」で書いている神輿をくるくるまわして狂わせる行為をさらにエスカレートさせたものといえる。奥女中の「日記」は現在の祭礼ではなく、現在の鉦やかつき屋台、人形をのせた作り物の存在も記しており、江戸時代の松山の祭礼を記録した史料としても貴重である。

また、松山郊外の東野にあった松山藩の御茶屋には、天明元年十月二三日に訪れている。この東野の御茶屋は松山藩初代藩主松平定行の隠居所で、寛文元年(一六六一)に完成している。東野御茶屋については、江戸中期の松山藩士松田義方による「垂憲録」に定行が建てた当時の様子が記されており、奥女

中の「日記」と比較検討することができる。

奥女中は東野御茶屋のうち、まず定行の弟定政の隠居所であった吟松庵に入っている。奥女中は吟松庵を定行の隠居所と誤って記しているが、中国の金山寺を模してつくられ、数寄屋があったと記しているところは、「垂憲録」の記述とほぼ一致する。吟松庵の敷地にあった安心堂については十王があったと記すが、「垂憲録」にも十王の肖像があったと記されており、これについても一致する。奥女中が吟松庵の敷地にあったかのように記す観音堂は、「垂憲録」では竹の茶屋側に記されている。

奥女中は吟松庵側を見終わった後に、今度は竹の茶屋側に移っている。この二つの茶屋の距離を三町程としているが、実際には1km近くは離れている。吟松庵と竹の茶屋との間には、かつては東海道五十三次の情景を模した情景が展開していたが、奥女中はそれについて何も記していない。奥女中が見た天明元年の段階では既に失われていたであろう。竹の茶屋については、床柱・床縁・欄間・障子格子・縁類・天井がすべて竹でつくられていたと記されている。竹の茶屋の向こうには達磨堂があったとされているが、これは「垂憲録」に達磨を安置したとある安心堂のことを指すものと思われる。奥女中がかさ茶屋という少し高い山があったと記しているのは、観音堂の南の小高い所で定行の慰めとして飴などを売らせていた傘の茶屋がかった場所であろう。奥女中が跡地と記しているのは茶屋は、いろいろなものを売らせて定行の慰めとしていたが、定行の死後松山城西の丸に移築されている。「垂憲録」には定行の死後の東野茶屋について、安永五（一七七六）年までに建造物の多くが取り払われたことが記されているが、それは奥女中が吟松庵と竹の茶屋が残る程度でそれ以外は田畑になっていると記している状況とほぼ一致する。記憶違いによる誤った記述はあるものの、奥女中の「日記」は、「垂憲録」に記された定行建設当時の東野茶屋が変容した姿を見事に描き出している。

三、江戸との手紙

「日記」には奥女中の松山での暮らしが記録されているが、もう一方で奥女中が江戸の家族や知人と交わした手紙についても、内容が要約されて記されている。これらの手紙はいずれも「御用飛脚」「御飛脚」とあるように、松山藩の公用飛脚により届けられた。奥女中の手紙の送受信を数えてみると、江戸へ手紙を送信した回数二七回、江戸から手紙を受信した回数二五回になる。つまり、一ヶ月に二丁三回は、飛脚により手紙を送受信していたことになる。江戸からの手紙の大部分には江戸を出発した日付が記されているが、それによると飛脚は、江戸から松山を最短で十二日、最長で二二日で手紙を届けていたことが分かる。奥女中は藩公用の飛脚を利用することで、かなり頻繁に江戸と手紙をやり取りしていた。

江戸との手紙の中で多いのは、「宿」「宿元」「追分」と記されているものである。奥女中の場合、宿とは実家のことを指すので、これらは両親との手紙であり、「追分」は両親が暮らす実家の住所と考えられる。江戸で「追分」というと本郷追分と内藤新宿の追分などが考えられるが、情報が少なく特定することはできない。この「宿」「宿元」「追分」からは、奥女中が松山滞在中に江戸に起こった出来事に関する様々な情報が送られている。

例えば、天明元年六月二日に届いた手紙には、閏五月十八日に御三卿の一つ一橋治済の御嫡子徳川豊千代（後の十一代将軍家斉）が将軍家の養子となり、十九日には薩摩藩の姫様（薩摩藩主島津重豪娘）が一橋家に入ったことが記されている。十月十一日に届いた手紙には、薩摩藩の姫様が一橋家の屋敷から西の丸に移り、茂姫様と称することになったとある。十一月二六日に届いた手紙では、江戸で地震がおきたことを知らせ、西の丸大奥では一時立ち退く用意もされたことが記されている。江戸の両親からの手紙では、奥女中が興味のある将軍家及び大奥の動向や江戸の災害情報が送られていたことが分かる。

また、そうした情報以外には、江戸で奥女中としての奉公先探しするおきさという人物のことが手紙に多く記されている。筆者とおきさとの関係は「日記」

には記されていないが、記述を追っていくと、姉妹ではないかと考えられる。おきさが最初に登場するのは、天明元年九月十八日に江戸の宿元から届いた手紙であるが、その手紙以来毎回のようにおきさについて記した手紙を交わしている。それらの手紙の内容を要約して、おきさの奥女中の奉公が決まるまでの経過を記すと、次のとおりである。

おきさは天明元年七月十五日に因幡国を出発して、八月七日に江戸に到着している。この時点でおきさは鳥取藩池田家に仕える奥女中で、国元の鳥取で勤務した後に江戸に戻ってきたものと考えられる。おきさは八月十三日に八代洲河岸の鳥取藩上屋敷に行き、上(鳥取藩主池田重寛)と奥女中の年寄衆などに土産を渡し、上からは五両、御姫様からは越後編一反、奥女中たちからも帯をもらっている。ここでおきさは鳥取藩の江戸屋敷への奉公を願っているが、翌年再び国元へのお供があるため奉公を断念している。松山藩江戸屋敷の奥女中おとゑが筆者にあてた手紙には、おきさがその後神田橋の鶴岡藩上屋敷に見え、つまりは採用試験に行くつもりであることが記されている。

それらの手紙を受けて、筆者は八代洲河岸の奥女中にこれまでおきさが世話になったことへの礼状を書くとともに、神田橋の鶴岡藩上屋敷の梅山や鉄砲洲の横須賀藩中屋敷の瀧山娘子、おやちなどにも手紙を出しており、懇意な奥女中におきさの採用を働きかけている。九月十日にはおきさは鶴岡藩上屋敷の奥女中富沢の部屋まで行き、鶴岡藩主酒井忠徳への目見を果たしている。しかし、その時点では鶴岡藩には奥女中の空きがなく、藩としては余計な人数は抱えることはできないので、まずは富沢が自分の部屋で雇う部屋方の奥女中、つまりは陪臣(又者)としてなら置くことができるという返事が返ってきている。また、おきさは殿様の好みの浄瑠璃を覚えるように鶴岡藩から指示され、師匠の文字菊に通い稽古をはじめている。九月二十九日には鉄砲洲の横須賀藩中屋敷の方にも行き、藩主西尾忠移に見目して浄瑠璃を披露しているが、忠移からは「殊之外能出来候」と高い評価を得ている。翌三十日には山崎与次兵衛寿門松の升落としての段を豊後節で語り、これも高い評価を得ている。結局おきさは六日間横須賀藩中屋敷に滞在し、最後には藩主忠移、御姫様、御幸様、大殿様の御部

屋様、奥女中の瀧山から様々な頂き物をしている。

おきさは十一月九日から神田橋の鶴岡藩上屋敷に勤めることが決まり、八代洲河岸の鳥取藩上屋敷や愛宕下の松山藩上屋敷にもお暇いや礼のために顔を出している。おきさの鶴岡藩での勤めは当初小間遣いで、奥女中の戸川に雇われる陪臣としての奉公であった。それも十二月十一日には三之間以上の居間の掃除などを勤める「三の間」に変わり、職制上は低いながらも藩に直接奉公する奥女中となり、名前もおきさからおとせへと改名している。

このように「日記」には、筆者と妹と思われるおきせという人物について、奥女中奉公が決まるまでの詳細な過程が記されているが、これまでの奥女中の研究と絡めていくつかのことを指摘することができる。

第一におきさの場合、奥女中奉公の条件として歌舞音曲の素養が求められているということである。おきさは横須賀藩では豊後節を披露しているほか、鶴岡藩からは殿様の好みの浄瑠璃を覚えることを命じられている。郡山藩主柳沢信鴻の隠居後の日記である「宴遊日記」にも、信鴻が奥女中を希望して目見を求めた女性に対して歌舞音曲の試験を課していたことが記されているが、信鴻の「宴遊日記」が記された時期は、隠居後の安永二(一七七三)年から天明五(一七八五)年までであり、「日記」とほぼ同時期とすることができる。また、同じく宝暦天明期には歌舞音曲好きな大名を風刺した黄表紙が出版され、そうした大名として松江藩主松平宗衍、久留米藩主有馬頼徳、新発田藩主溝口直温の名前があげられている。従来の研究では、大名の歌舞音曲への傾倒を隠居後の趣味と考える向きがあったが、「日記」からは宝暦天明期の歌舞音曲の流行に合わせて、現役隠居を問わず大名の奥向きの世界で歌舞音曲が受け入れられていた様子がうかがえる。

第二に「日記」からは奥女中としての採用にあたり、藩を超えた奥女中のネットワークが機能していたことが見えてきた。郡山藩の柳沢信鴻の場合、目見の紹介者として口入業者や人宿、前に奉公していた侍女、芸能の女師匠、知り合いの町人があつたとされているが、別の藩の奥女中の働きかけは見えてこない。奥女中の横のつながりは奥女中本人の私的な日記だからこそ見えてきた

ながりといえる。おきさの奥女中の採用に向けて、筆者が出した手紙の宛先は、愛宕下の松山藩上屋敷の幾村・おとゑ・おさい、八代洲河岸の鳥取藩の野沢・川瀬・おかな、神田橋の鶴岡藩上屋敷の梅山・富沢・戸川、鉄砲洲の横須賀藩中屋敷の瀧山・おやち・おるせなど、藩を超えて広範囲に及んでいる。このうち八代洲河岸へのルートについては、「日記」の天明元年九月二三日の記述により、筆者が松山藩上屋敷の幾村を通じて鶴岡藩上屋敷の富沢へと働きかけたものであることが分かる。横須賀藩中屋敷へのルートは、筆者のもう一人の妹であるおるせが奥女中を勤めていた関係であろう。つまり、おきさは先の勤め先である鳥取藩、姉妹のいる松山藩、横須賀藩の江戸屋敷に出入りする一方で、鶴岡藩に勤めることになっており、そこにネットワークを背景に複数の藩を渡り歩く奥女中の姿が見えてくる。

また、筆者は鳥取藩主池田家の十五評の勝負付の俳諧や鶴岡藩酒井家の江戸宗匠十五評の俳諧をおきさを通じて手に入れ、俳諧好きの藩主定国に見せているが、これも奥女中のネットワークがあつてこそそのものといえよう。定国は安永九年から天明二年にかけて行った十六人の連衆との俳諧の成果を「俳諧九百韻」にまとめている。この十六人の連衆は従来松山藩士と考えられてきたが、このうち五鶴、如栄の二人については「日記」の中に奥女中の俳号として登場することから、連衆には奥女中も加わっていたことを指摘できる。このことは、大名の文化が奥女中のもつ横のつながりを背景に活性化されていたことを示すものと考えられる。このような江戸で織りなされる奥女中のネットワークと大名文化との関わりが、「日記」からは見えてくるのである。

四、江戸から松山まで

奥女中は藩主定国から二日遅れの天明二年三月十三日に江戸に向けて松山を出発した。荷物は長持に入れて、あらかじめ送っているの、旅に必要なものだけをもつての出発であった。当初三津浜から船に乗る予定であったが、潮

の具合がわるく急遽高浜に廻っている。奥女中は駕籠に乗り三津浜に向かったが、駕籠酔いで途中から駕籠を降りている。船に乗ってもすぐに横になる有様であった。さて、ここで行きがけ同様、帰りに奥女中がたどったルートを整理してみると、次のようになる。同じく宿泊地には宿泊した日付を付した。

松山 高浜 御手洗(三ノ十三) 因島 高見(三ノ十四) 多度津 金毘羅 善通寺 日比(三ノ十五) 牛窓(三ノ十六) 室津(三ノ十八) 二ツ家(三ノ二二) 安治川口(三ノ二三) 大坂(三ノ二四) 撰津 一ツ家(三ノ二五) 淀 伏見 京都(三ノ二六) 四ノ一 膳所 女川 石部(四ノ二) 大野 関(四ノ三) 龜山 四日市 桑名(四ノ四) 関 鳴海(四ノ五) 大浜 藤川の内大はまぐり 御油(四ノ六) 荒井 浜松(四ノ七) 袋井(四ノ八) 日坂 佐夜の中 島田 藤枝(四ノ九) 興津(四ノ一〇) 油井 蒲原(四ノ一一) 四ノ十二 吉原 柏原 沼津(四ノ十三) 箱根 小田原(四ノ十四) 大磯 鳴立沢 藤沢(四ノ十五) 程ヶ谷 川崎(四ノ十六) 品川 江戸

当初瀬戸内海の航海は順調に進み、三月十五日には多度津に着き、奥女中は金毘羅と善通寺を参詣している。三月十八日には室津で船から上がり、町屋の風呂に入り、江戸浅草東光庵伝授の蕎麦切りを食べている。三月二二日になりようやく室津を出船しているが、途中急な風で船は大騒ぎとなり、帆を下ろし手漕ぎでなんとか兵庫に辿り着いている。船は大揺れであったため、奥女中は船酔いで苦しみ、度々戻したと記している。また、この日に松山藩の飛脚船から定国が無事に大坂に到着した知らせが入っているが、定国一行も三月十五日に同じ海域で苦労したことが記されている。定国の場合も突風により船が流され、兵庫で上陸するはずが須磨で上陸している。御座船の碇三丁がなくなり、供船も流されて家島に避難したと「日記」には記されている。定国自身もこの旅の模様を「壬寅歳紀行」という紀行句集に記しているが、そこには御座船か

ら小舟で逃れ樽水という浦の民家に避難したとあり、「いと心細さいわんかたなし」と感想を書き付けている。

奥女中は三月二四日に松山藩の大坂屋敷に着くとすぐに道頓堀芝居を見物に行き、その帰りには河内屋作兵衛という大きな茶屋に行っている。芝居は角芝居藤川山吾座の「一の谷嫩軍記」で、奥女中はここでも江戸と比較して、芝居自体は江戸と変わらないが、衣裳は江戸よりも優れていると記している。また、芝居小屋の棧敷に出てくる女性は赤の前垂れに太い紐で結び、茶屋の仲居は赤の前垂れに鬱金縮緬やモウルの紐で結んでいると、「ここでも働く女性の姿を「日記」に興味深く書き留めている。

三月二五日には大坂屋敷を出立し、伏見に向けて三十石船に乗りこんでいる。この日はとても雨が強く、途中引船できなくなり、摂津の一ツ家という所で夜を明かしている。三月二六日によろやく伏見に着き、駕籠に乗り松山藩の京都屋敷に入っている。往路では京都見物しなかつた奥女中は、この復路で京都を精力的に歩いている。三月二七日には大仏を参詣し、三十三間堂、清水寺、祇園社と廻っている。三月二八日には四条の中村猪八一座の芝居を楽しんでいる。中村富十郎がとてよく、尾上菊五郎と中村重蔵が花道の両方から出て島原へ行くところがすばらしく、藤川八蔵は仕草がよかつたと、江戸芝居に親しんでいる奥女中らしく芝居評を「日記」に記している。三月二九日には天満宮と金閣寺に行き、金閣寺では庭も見物している。

京都をじっくりと見物した奥女中は、四月二日に京都屋敷を出立している。奥女中は帰りに石薬師の杖突饅頭、四日市の焼き蛤、安倍川餅などの名物を食している。四月八日には江戸から和歌山へ向かう紀伊中納言の行列を天龍川近くの百姓家でやり過し、四月十三日には公家の行列が通り過ぎるのを吉原宿の茶屋で待つなど、東海道ならではの時間調整も行っている。四月十五日には藤沢宿まで出迎えに来た勝次郎という人物に、父親への土産として小田原の鯉のたたきと佐夜の中山の水飴を渡している。江戸愛宕下の松山藩上屋敷には、四月十七日に到着している。

おわりに

江戸時代、男性に比べると女性が書き残したものの数は圧倒的に少ない。そうしたなか、女性史を長年研究されている柴桂子氏は、『近世おんな旅日記』（吉川弘文館・一九九七年）で女性自らが書き記した旅日記を百八十点見つけ出し、武家に限らず多くの庶民の女性が旅を契機にその行動を旅日記として書き残したことを明らかにしている。本資料も江戸を離れることを契機に記された旅日記であることは確かであり、その意味では柴氏の調査成果に一つの事例を付け加えることができたのではないかと考える。

しかし、もう一方で本資料が旅日記としてのみ評価すればいいのかという疑問も残る。藪田貴氏は、『男と女の近世史』（青木書店・一九九八年）で女性が旅に出るといふ非日常を記した旅日記だけではなく、数が少ないながらも日常を記した日記も存在していることを指摘し、父親の死去という限られた条件ではあるが、実際に父親に変わり家政日記を書き記した西谷さく女のことを紹介している。本資料は旅日記であると同時に、奥女中としての日常も書き記している点で、西谷さく女の日記に近い部分も有している。奥女中は江戸時代、女性が家から離れて自立して生活を送ることができるとしての職業であった。そこに奥女中としての仕事を続ける上で必要な情報を書き留めておく日記が記される余地があつた。

それでは、本資料のような奥女中の日記はどの程度残されているのであろうか。奥女中を研究する畑尚子氏は『江戸奥女中物語』（講談社現代新書・二〇〇一年）の中に、奥女中の日記について「奥女中が奉公中に私的な日記を書くことはなかつたから、回想録は残っているものの、著者もまだリアルタイムの日記を目にしたことがない」と記している。畑氏が奥女中が私的な日記を書かなかつたことに疑問は残るが、本資料はリアルタイムとまではいかないまでも、全国的にも極めて稀な奥女中の日記であることは間違いない。関連する資料がなく、単独で残った「日記」であるので不明な点は多いが、今後丁寧に読み込むことで、本稿でも触れた奥女中のネットワークの存在など、新たな

史料翻刻

〔(題箋) 伊豫国松山在勤中并道中往返日記〕

天明元五年五月十六日

朝曇ル
四時ら雨

一 今朝愛宕之下御屋しき五時前出立、品川鎰屋と申茶屋二而送りの人二(暇)いとま乞濟、夫より川崎万年屋と申茶屋にて昼休、泊戸塚宿江夜五時過着いたし餘程駕籠計二而難儀、鎌倉鶴岡八幡乃御普請場所より甚介出向ひ二参逢ひ、江戸両親乃方江書状差出入

五月十七日 朝雨
昼ら雨止曇ル

一 馬入川留り藤沢宿江泊る、戸塚より藤沢迄歩行にて参ル、遊行寺江参詣いたし藤沢宿江夜(朱書)「朝」四時前着泊
同 十八日 快晴

一 馬入川明き藤沢宿九時前二出立、馬入川船渡し大磯まで歩行にて参ル、又酒匂川留り候故大磯二泊ル、虎が石見物致し、虎か石の手前に山下善福寺にて龍東山といふ石山二あな明き候所数々あり、見物致し候

同 十九日 快晴
一 大磯宿明け七時前二出立、酒匂川臺越し箱根湯元二而昼休、御閑所無滞通りと(時)ぶげの宿泊り二而七時過二着、箱根ふもとより峠迄歩行二而参ル、大磯出立夜乃明けぬ内嶋立沢こゆるきの磯通り申候

五月廿日 快晴七時過ら雨

一 箱根とぶげ(峠)の宿明六時前出立、かち二而沼津迄まいる昼休沼津宿、夫より駕籠に乗お元殿兩人江先江参り、原二而三保乃松原、う(守)き嶋か原、富士見ゆる、吉原宿泊り江七半時頃着、名物(富士)ぶじ(富士)の白酒給へ申候、原宿ら八富士山正面に

見ゆる、富士川出水にて川留り、十九日ら廿五日まで吉原宿二滞留、江戸ら御飛脚着、大守様御風氣二被為人、御発駕六月朔日二相成候由申来ル、逗留の内いちと参り申候

五月廿一日 雨

同 廿二日 快晴

同 廿三日 快晴

同 廿四日 快晴

同 廿五日 曇ル四時ら快晴

一 吉原宿二五夜逗留、右乃うち東善院と申寺泊り乃近所ゆへ庭見物二参ル、右乃山二浅間大(音)ほさつ(音)の宮あり外にもあり、富士川明き候て吉原宿明六時過出立、左り二吹上乃濱見ゆる、五ツ半時ころ富士川無滞渡り、油井にて昼休、お(奥津)きつ川かち渡りさつた(津)とぶ(津)げ、此所ら吹上乃濱、袖しが浦、三保乃裏見ゆる、左り二田子乃浦見ゆる、江尻宿泊り二而七半時着、本陣泊り之所智恩院御登り二而差合はたこや江泊り候所、殊之外宿あしく給へもの等きたなく難儀いたし候、江戸表江御飛脚出書状差出候

五月廿六日 快晴

一 江尻宿五時出立阿部川臺越しに渡り、阿部川餅名物ゆへ給へ候処殊之外風味宜敷、まり(丸字)こ宿昼休、う(守)つ乃山かちにて参る、藤枝宿泊り乃所、土方丹後守様細川様先江御出本陣さし合ひ、藤枝乃近所鬼(鳥)しまと申所迄参り候得共、一里程跡へ戻り岡部宿江七時過二着、大井川出水二而川留り、岡部宿二三日逗留、う(守)つ乃山左り乃方二薦乃細道あり

同 廿七日 快晴昼ら雨

同 廿八日 風雨

同 廿九日 曇ル

一 大井川明き岡部宿四時出立藤枝宿昼休、瀬戸川かち渡りいさ(從務)か乃川なり、大井川無滞臺にて越す、夫よりさよ乃中山かち二而夜二入候故、夜なきの石は色合見江わかり不申てふ(燈)ちんにて見申候、餘程あふきなる石二而候、名物乃あめ乃餅給へ、日坂宿の泊り江夜五時過二着

五月晦日 快晴

一日坂宿明六時過出立みか乃原袋井宿昼休、見付宿泊り二而八時過着、江戸江状出入

閏五月朔日 快晴

一見付宿明六時過出立昼休濱松宿昼休、天龍川舟渡し荒井船渡し五拾町吉里の渡し之由、右之方二高師山見ゆる、此海に色々乃貝あり案内申スト云、貝乃中二カニすま居候よし、カキ蛤多くあり候由、荒井御閑所無滞越し茶屋江立寄、吸物御酒など給へ荒井名物乃よし二て鰻を出し申候、白須賀宿江暮時二着、此邊より遠州灘見ゆる、尤汐見坂邊は八別而能く見ゆる

同 二日 雨天

一白須賀宿明六時過出立尤かち二而、昼休御油宿迄参り雨強ふり出し候二付駕籠二乗、岡崎宿泊り江七半時頃着

同 三日 雨

一岡崎宿明六半時出立、矢作橋御修復二付船渡し馬右之川江はあり、三嶋様お清殿明け荷ぬれ候二付、昼休之所ちりう宿江すぐ二泊二相成八時過着、尤船渡し濟川役人参あやまり証文など差出し、暫く手間どり申候、西矢作といふ所十王堂乃前二淨るり御前乃墓あり、右之方に八ッはし江乃道あり

同 四日 曇

曇 昼は快晴

一池鯉宿五時前二出立、宮江昼休二而桑名まで七里の船渡し之所、風悪敷すぐ二昼休の宮江泊、夫は夕方あつ田の宮江参詣いたし、至て結構成る宮作り二而、御屋根不残ひわた葺石とふるふおびた、敷御座候、池鯉宿は江戸表江御飛脚出御状差出し候

同 五日 快晴

一宮宿五時頃出立、七里乃渡し順風二而九ツ時前二桑名宿江着、此所昼休、尾州勢州乃境なり、右昼休之場所江なご屋乃小刀はさみ其外あきなひもの色々持参り候故調ひ申候、夫は式里程かち二而参り、又駕籠二乗石薬師宿泊り江七時過二着致候、杖突坂あり

同 六日 雨

一石薬師宿明六ツ時前出立、坂乃下二薬師堂あり、夫より昼休江関江着、左りに地藏堂あり、是を関乃地藏といふ、鈴鹿山かち二て登りものすき山なり、みな口泊二而七半時過着、此所江コリ色々持参りあきなひ候故調ひ申候、鈴鹿山を越すは川あり、田村川を渡り右に「田村明神乃社あり」

閏五月七日 快晴

一みな口明六時過出立、野ちの玉川膳所乃はし此邊より三上山見ゆる、昼休草津宿江着、此所名物女川なめしてんかくかふ乃もの菜漬出し候、風味宜敷候、瀬田乃橋渡り夫は石山寺江参詣致、折から開帳あり賑二御座候、門前二茶屋おびたしく出来、江戸の中洲のまねらしく瀬田乃川ばた二茶屋出来居候、女子赤まへたれ誠二すさ間敷、石山二而山乃上につき鐘堂あり、参詣の男女二限りなくかねをつかせ候、ほたい乃ため二なり候由、石山乃本堂の正面乃額秀頼二世安楽乃ため浅井備前守女と認めこれ有ル、観音乃御せひ餘程高く坂を登り向ふ乃方二弘法大師の木像あり、川岸にかるわざのやうなしかけ二いたし海の貝ひろひ申候、又見せものなとも御座候、大津宿の泊り江暮時頃着いたし候、石山観音の脇に紫式部源氏物語つくられ候庵室あり、つき鐘は何れ茂寄合ひ候てつき申候、泊り宿大津迄乃道は膳所乃城前を通り申候、瀬田より膳所の城下迄乃間をまのく入江と申候よし

同 八日 快晴

一大津宿明六時過出立、深草山里も有り藤乃森墨染右之方二女郎屋あり、夫より駕籠之もの二別れ昼じきいたし尤伏見にて中喰、九時前二伏見江着いたし昼喰、以後湯二入髪を仕廻ひ、七時過を乗船いたし伏見より少々舟二て参り、大守様御召乃御座船拜見いたし、夫は淀にて御召御座舟附居是も拜見いたし、水車見物いたし候所、此節八くるま廻り不申候、夜船二て大坂御屋敷江九日乃朝五時前に着いたし候、駕籠之者喜代三庄五郎外二彦人右三人斗見立に参り候よしにて、橋乃前に待居見立くれ申候

閏五月九日 快晴

一大坂御屋敷江朝五時前二着いたし、しまひいたし天満乃開帳江参り候処、い

ろく／＼かざりものてうちんとぶるぶ等夥敷御座候、参詣の人数くんじゆいたしやうくおし合ひ候ておがみ申候、開帳場世話役乃上下はつひ二ひわ茶にて御座候、夫よりそね崎之天神江参り、寺町乃茶屋江参吸もの酒なと給へ、夜五時過御屋敷江帰り直に御屋敷大坂御代官大屋四郎兵衛様江手紙出入、御屋敷には蚊おり不申候

同日 快晴

一 大坂御屋敷に船にて住吉江参詣いたし、所々見物いたし、住吉乃橋損し居申候、茶屋二而昼喰給へ、夫天王寺いく玉江も参り候、いくたま殊之外賑なる所にて不断江戸乃浅草山下なと乃やうにて女郎其外藝者など見懸け申候、いく玉乃名物のよしにてなんはんうんどんや江寄皆々うとんを給へられ候、私はそは切を好み給へ候處ことの外風味宜敷候、夫に船に乗り夜五時過御屋敷江帰り、右乃留守二大屋四郎兵衛様を御使被下名物虎屋が饅頭一折とたく八ん漬大根一桶被遣候、二條御門番之頭間宮孫四郎様を京都名物乃よし丸山煮梅一壺被遣候、右御兩人を品々被下候二付江戸表御両親江も右之段書状二申上候、尤江戸表江之書状者大坂御屋敷江頼み置申候

江戸御屋敷小日向新けい橋

大屋四郎兵衛様

江戸御屋敷小日向筑地

間宮孫四郎様

同日 曇ル

一 大坂御屋敷所々拝見いたし、昼七時頃を御門前にて乗船いたし、夫を寺里程参り御国より乃迎ひ関船に乘移り、雨ふり出し大坂横町与申所二滞船いたし候

同日 昼雨昼過を快晴
船出不申候

閏五月十三日 雨昼を晴ル

一 少々風能く四時頃船出候処、風悪敷相成安治川と申所わずか六町程参り滞舟致候

同日 快晴逗留

同日 快晴

一 順風にて明六時過船出申候、海上より一乃谷須(唐)あわ路嶋和田乃みさき見ゆる、拾八里乃播磨灘無滞越、風悪敷相成り三里程跡へ戻り、明石乃表江舟付け暮方二小船二乗替湊江附け、明石御城下乃湯屋江参り行水なと致、尤右之湯屋かり切り二いたし御手前乃人斗り入湯を五時前二帰り、月至てさへ渡り、四時過迄御酒なと出船中にて月をながめ候所、誠に月乃名所とてかく別乃詠めて候處、左之通りほふば(明)衆申合発句などいたし候

頼み奉る、君乃御供して君もなれぬ山を越し川を渡り、軒端みじかき家に夜を明しなとして日を重て、舟に乗りて名高き明石乃裏「浦」に船乃よりにけり、月乃波にゆるるゝげにもふりにし名所と者言葉にも尽しかたし

(朱書) 月出て夏さへおかし明石かた 五鶴

何處よりもおかし明石乃夏の月 如栄

明石かた幸に懸りつ夏乃月 里夕

同日 快晴七時少雨直二止ム

一 明七時明石を出船、此邊乃海上に姫路乃城高砂見ゆる、明石より江嶋迄拾三里ほど行、江嶋二滞船、此所を向ふに酒井雅楽頭様御番所見ゆる、右に室見ゆる、右二室見ゆる、くづ屋少々あり

同日 快晴昼を雨暮時止ム

一 明六時過船出候所、向風二而漸式里程参り備前国本嶋ト云所二滞船、濱邊江上り貝などひろひすく二濱邊二而昼膳給へ申候

閏五月十九日

一 朝五時前船出七里程参り引汐二而備前の内しもつとんと申所二泊ル、しもつとの手前左之方はるかに金比羅乃山見ゆる、金比羅江御初尾新江書付いたし、鳥目くゝり附上申候、此所二而蛸のいきて居候を蛸師持参り候二付調ひ候處、舟中二酔なく候故塩を附け給へ候処殊之外風味宜敷、暮六時頃を汐宜敷相成四ツ時分迄二五里程参り、南風吹出し少々波あらく成候二付式里程跡へ戻り

手嶋と申所江一夜逗留

同 廿日 明六時より雨五時より晴天

一南風二而船出不申 大守様十八日寅ノ刻室より御出船被遊候由御国江之御飛脚
此方江寄り右之段窺申上候、夕方濱邊江上り貝なとひろひ暮方に舟江帰り申
候

同 廿一日 雨四時より虹吹晴ル
八時過り夕立雷雨

一朝五時過二船出申候、四時迄二漸式里程参り備中乃国白石と云所二しばらく
汐待、備後の国鞆（毛）と云所の湊二滞舟、白石（毛）とも迄三里程御座候、阿部豊後
守様御国許之由

同 廿二日 快晴

一明七時輒乃湊を出船風早乃浦三里ほど行、今晴御領分是より松山江拾八里、左
りの方二松平内膳正様御領分見ゆる、御馳走船御使者船など見へ申候、小家
などあそこ爰に見ゆる、追風にて殊之外宜敷七時過二三津乃濱江着いたし一
夜逗留、漸舟中無滞まづ八三津の濱江着いたし何れも大歎発句などいたし其
夜いわひ候而御酒吸ものなど出、夜八ツ時頃迄吉右衛門殿初め何れも打寄咄
し申候

げに憂旅なりと思ふけしく多かりけり、かくて 君乃しるしめす三津
となんいふ濱にたそがれ二付ぬれば、明けなば 御城にまかりなんとて

そ乃浦二夜を明さんと云合侍る二、先づ心落附ぬ

（米書） 古郷もかく涼しきや三津の濱 五鶴

古郷に涼風似たり三津乃濱 如栄

憂旅をわすれて涼し三津乃濱 里夕

三津より 御城江吉里半御座候

閏五月廿三日 快晴

一明六時過三津の濱より上り町家二而湯二入茶漬など給へしたく致し、夫より三津
の濱御茶屋江参り御昼膳いたくきすぐ二駕籠二乗り 御城江入申候処、夥敷
見物出申候、縄手と云所二而吉右衛門殿初め供之人々江暇乞いたし、 御城

江八時前着致し御料理等戴き、夫より行水なといたし奥江出御夜長いたくき、

六時過部屋江帰り早々休申候、着前二江戸表より両度書状着いたし居申候

麻苧 三把 お友江 御末之衆

同 式把 おさつ江 麻苧 式把つゝ 三人江

同 式把 御中居江

右者お哥殿始め私迄遣し申候

同 廿四日 晴天夜中雨

一三津の濱御着乃御注進

同 廿五日 朝雨夫より晴ル
時々降ル

一太守様御機嫌能九時御着城被遊、少々御表二而御手間取被遊すく二奥江被為
入皆々御目見被仰付、江戸表江御用飛脚出ル

同 廿六日

同 廿九日迄快晴

六月朔日 快晴

同 二日 快晴

一江戸表より御用飛脚着、宿より書状来ル、宿より之書状二申越候者、閏五月十八
日吉つ橋民部卿様御嫡子様徳川豊千代様御事御養君二被為成、同十九日二薩
摩守様御姫様一つ橋江被為人、御供立者御本丸御目付衆共外布衣以上之御方
并一つ橋附之衆薩摩守様御家来入交り候而之御供之由、珍敷御供立、右御姫
様二者若君様御簾中様江被為成候二付、一先つ一つ橋江被為人、夫より御本丸江
御入被遊候由、若君様二者閏五月廿五日西丸江被為人候由、右之趣委敷江戸
宿元より申越候

六月三日

同 晦日迄 快晴

一六月三日、殊之外登せ強顔二吹出ものいたし、耳鳴候二付道庵殿薬給へ申候

一同四日、江戸表江御用飛脚出ル

一同六日、江戸表江御用飛脚出ル、宿江も状遣し申候

- 一 同七日、五月十日出乃大廻し今日無滞着致候
- 一 同十日、閏五月廿五日江戸表^ら御飛脚出今日朝五時前二至着^(到)、宿^らも書状遣又
- 一 同十三日、御用飛脚出ル、宿江も書状遣又
- 一 同十八日、当月七日出之御飛脚至着、宿^らも書状来ル
- 一 同廿六日、江戸表江御用飛脚出ル、宿江も書状遣又
- 一 熊かたゐ与申所二而御鉄砲御覽遊ばしはた火と申もの御座候、夜二入花火上ル
- 一 同廿八日、雨乞被 仰付台山寺乃山江山伏登り御祈禱いたし候
- 一 同廿九日、当月十六日出之御用飛脚今日至着^(到)、宿^ら茂書状来ル
- 一 七月朔日
- 一 今日四ヶ寺江雨乞御祈禱被仰付候
- 一 七月二日 快晴
- 一 今日迄三十日餘之日照り
- 一 同 三日 雨天
- 一 今日雨降り申候、吟的殿薬給灸治も致候
- 一 同 四日^ら 快晴
- 一 同 六日迄 快晴
- 一 六月四日、御定式御飛脚出ル、宿江も書状遣又
- 一 同 七日 四時前迄雨雷少シ
- 一 今日御中老役中川傳兵衛殿臺所江雷落謠本少々焼候由、三之丸^ら式町程有之、尤御曲輪内御堀端之屋敷二御座候
- 一 同 八日 夕方雨
- 一 跡月廿五日出之御飛脚至着^(到)、宿^らも書状来ル
- 一 同 九日 快晴
- 一 同 十日 同
- 一 同 十一日 同
- 一 昨夜^ら雨天二付御飛脚出候筈之所相延申候
- 一 同 十二日^ら 快晴
- 一 同 十四日迄 十三日八式百十日之処晴天
- 一 同 十五日 朝曇ル夕方^ら雨
- 一 同 十六日 雨
- 一 同 十七日^ら 快晴
- 一 同 廿三日迄 快晴
- 一 七月十七日七ツ出頼出不申、十八日^ら病氣二付引込廿日出勤いたし候
- 一 七月十九日二者御定日二候得共御飛脚出不申候
- 一 同廿三日江戸^ら当月五日出之御飛脚今日至着^(到)、宿始メ所々^ら書状来ル
- 一 七月廿四日 夕方^ら雨
- 一 西丸御山に初葎とり二参り候
- 一 同 廿五日 朝雨昼過^ら止曇ル
- 一 同 廿六日 曇ル
- 一 御庭江参御鉄砲被遊候を拝見いたし候
- 一 同 廿七日 雨
- 一 御居間之御庭之堀乃屋根江四尺余乃へび出申候
- 一 同 廿八日 曇ル
- 一 同 廿九日 快晴
- 一 八月朔日 昼過^ら曇
- 一 同 二日 雨夜二入止
- 一 西丸二而花火あかり拝見いたし候
- 一 同 三日^ら 快晴
- 一 同 五日迄 快晴
- 一 八月四日御用飛脚着、宿^ら八書状参らず、江戸表七月十二日夜大あらし致候由申来ル

同 六日 雨夕方止

同 七日も

同 十三日迄 快晴

一 八月七日至てあつさ強、すべて当月四日よりさ返り暑サ甚強く誠に極暑乃如く風一向無之候

一 八月八日御飛脚出ル、四日之御定日延ひ七日乃日附にて今八日出立、宿江書状并木綿言反御国名物素めん遣申候

一 八月十三日、道護八幡之祭祀二付、御物見にて見物いたし候処、祭礼おもしろからず、吉番ほこ式番ほこと申鋒三ツ四ツ少々乃出しきツ大なるはしやうの作りもの、外二子供鬼乃面などをかむり大鼓鉦を打通り申候、神輿所乃風之由にてくるわせ候由にて大勢ひ乃見物の中江はいり、見物の人を追ひちらしくるりくくと廻り申候、右乃人八しほりの単もの二たすきをかけ居候、八時過より祭礼渡り少しの間二相濟、夫三三三大明神江参詣いたし候、御物見乃向ふ二ハツ又と申す榎有之、右之榎二狸すま居候よし

同 十四日 昼快晴夜二人雨

同 十五日 曇夜五時も月出候得共

同 晴れ不申候

一 燈火も吹消にけり今日乃月

古郷は詠めも同じ今日の月

同 十六日 雨昼過も快晴

同 十七日も

同 廿一日迄 快晴

一 八月十八日、今日江戸表も八月五日出之御飛脚至着、宿も七月廿一日、同廿六日、八月出之書状一所二着いたし候、有合之由にて丈長乃紙参り候、七月十二日八式百九日乃日にて候処、江戸表昼九時より大嵐にて夜九時過相止、北風故江戸表宿江は当テ不申候由、十年以前辰年八月二日乃大嵐乃ことく所々大水にて新大橋、永代はし、千住大はし、何れも少々損、其外所々小橋等は不残落候由、飛鳥山下邊迄は舟にて通ひ候由申越し候

一 今日昼時灸治いたし候

八月廿二日も

同 廿四日迄 雨

一 八月廿四日御用飛脚出入、宿江も状遣又

同 廿五日も

同 廿九日迄 快晴

一 八月廿六日味酒大明神祭礼二付御物見江見物二出候、一番戈夫も四本戈かつぎ屋たひ六つ色々人形つくりものなど出候、神輿一躰八御城江被為入候二付クルハセ不申、余式躰八誠にどふ二つき上げ候様二手にてつき上げ、夫より大勢ひ乃人の中江はいりくるハセ申候、四時も祭礼渡り九時前二相濟申候

一 八月廿七日、かつか山と申所江松茸をとり二参候、三之丸も式里乃餘も御座候、岩井谷と申所の庄屋にてしばらく休昼喰いたし、夫もまた西宝寺と申所二而休、かつか山江参候所、至て難所にてやうく右の山江登り、誠に深山二而御座候、右乃山二かつか大権現乃宮あり、松茸きつやうく取申候、松乃木二とまり登り申候、猪狼などおひたしく出候由、帰り二又西宝寺江寄したくなといたし三之丸江夜五時過歸申候、昼休前二千秋寺江も寄申候

西宝寺者

天台宗 本尊薬師

千秋寺八

おふ（黄檗）はく宗 本尊釈迦

九月朔日 雨朝五時前少々地震

同 二日も

同 五日迄 快晴

一 九月五日、兜力二御覽二入申候、何れも見物いたし候、太キサ金（指）サシニテ言尺式寸程、色はせひひつ二而かぶと乃かたちの如く角言本御座候

九月六日も

同 七日迄 曇

一 九月七日、今日御用飛脚御状仕立御表江出入、翌八日出立之積り、江戸表宿

元江書状外二體式枚上げ申候、おりて初御使番江體三枚お哥殿へ遣申候

同 八日 雨

同 九日 快晴

一 九月九日、今日奥二而香利申候并発句いたし候、左之通り

たんせひ乃袴も見へけり菊乃花

菊作り主乃世話はいかばかり

同 十日も

同 廿九日迄 快晴

一 九月十日、丸山江御鉄砲二被為人御留守二西の丸御庭江参り、初茸をひろひ

并奥にて香利申候、初めて香元致候

一 同十三日、御月見延ひ十五日二相成り候、八重崎殿御部屋にて香利申候、月

見二付発句いたし左之通り

酒につくちりも見へけり後の月

立こめし障子も明けつ後の月

一 同十七日黒軸乃御筆戴申候、八重崎殿御部屋にて香利申候

一 同十八日、江戸表九月五日出之御飛脚今日着、宿元へ八八月八日、同十一日

同十三日、同廿四日、九月五日右五度乃日附け乃書状今日着致候、おきさ事

七月十五日因幡の国出立いたし候而、八月七日二道中無滞江戸表江着いたし

すぐ二大加屋江参り、夫へ八代洲河岸江むかひ^(迎)かゝる之人と一所二上り翌日八日二

追分江参り候由、むかひ^(迎)助五郎様品川迄御越し之所見かけ不申候二付、大森

迄御出候得者向ふらおきさ駕籠二て参り候二付、すぐに大森乃茶屋江野沢殿

おきさも一所二上りゆるく逢ひ候よし、八代洲河岸江十二日に上り候由、

上江も御着さし上御年寄衆初メ赤飯かつほきち^(土庫)焼みやけ二上候由、井上弥兵

衛殿へも肴一折差遣候由、おきさ事 上へ今五両戴き 御姫様へ越後嶋寺反

戴きおるせを紋ひろふど^(腰)し帯奥皆々様へもふる帯もらひ候由、八代洲河岸

江御奉公願いたし候得共、来年又々御国江之御供御座候二付御奉公之義は御

断申上候由申来ル、助五郎様初兄弟中へ文来ル、おとゑ殿いさの殿へも文来

ル、おきさ事当月中二者神田は^(橋)し江御目見二上候つもりのおとゑ殿へ申

来ル、おきさへ御両親様へ金貳百足助五郎様へ勝次郎様へ三味線張替代上候

よし、先達而私へ上候木綿助五郎様のに相成候由、勝次郎様へ小梅箱江入もら

ひ申候、おるせを夏ふとん切巻丈五尺貫候、御とへ様御願ひもいまた出来不申

候由おるせ方へ申越候、江戸表相替事無御座候由、御養君様御祝儀二付御

ふる廻ひ之御献立御能御番組外二狂哥色々之書付被下候二付則 上江御覽二

入申候、幾村殿へ油被下、おとみ殿始へ^(書)ひん附巻本すき^(貫)ツもらる申候、江戸

表も八月十五夜は曇り候よし、助五郎様名月発句被成候由申参り候左之通り

曇るとも雲心あれ今日乃月

一 九月十九日、御定日御飛脚延申候、今日順的殿葉休葉いたし候

一 同廿日、大林寺江参詣致儀^(ヨシツル)鶴二始而逢ひ申候、天明元五年三月九州帰り国之

内豊後之さいき^(佐伯)郡と申海邊二玉^(タマ)御座候由、つくし^(筑紫)乃人ひろひ候由二而大林寺

江持参いたし義鶴江居合すぐ二もらひ候由、尤よし鶴むすめ^(娘)も其節一所二お

り候よし、兼てよし鶴に遣し度心かけ二て大林寺江持参いたし候由、よし鶴

右之旅人江申候者、金子二ても出候事なら戴き申間敷由申候得者、決而御初

尾も入不申候由二て、右之旅人はすぐ二帰り申候、右乃人はつくし^(筑紫)の人二而

五人つれ二て西国ヲ廻り候由、右言人斗たまを持参いたし候よし、名は利助

と申由二而御座候、右玉乃色はすいしやう^(水島)のやう二て中二米乃やうなる物浅

黄紅白二すき^(透)見江申候、玉大キサ金さし^(指)にて式寸程丸く御座候、少々おもみ

御座候、義鶴修行二出候前に何方へか僧言人福儀と足中外二天^(世)ちくの石四つ

遣し候由、右福儀乃中二御座候、大願成就いたし候ハ、明け見候やう二右乃

僧被申候由、所々国々廻り仕廻願成就いたし明け見候所、中二天^(世)ちくのこま

のつのとちいさき劔御座候、外二天^(世)ちくの石四つ紅の色二て大きく成候時も

あり又ちいさく相成候時もあり、らてんと申△此やうなる形にと貝の様成る

もの二而御座候、足は龍宮へ納まり候由二て御座候、むき^(麦)わら二てこしら^(拵)へ

候弘法大師さま^(様)こくう^(虚空蔵)ぞぶ^(様)様拜見いたし候、大林寺二て新蕎麦出色々馳走二

成暮方二帰申候、右乃たまとおなし様成る玉、松平土佐守様御国許二御座候

由、玉の名は満珠千珠と申二つ御座候由、右之玉おがみ^(押)候人申候者、同じ様

成る玉之由申候よし義鶴申聞候

一 九月廿三日、江戸表江御用飛脚出ル、御両親様始メ兄弟衆不残江書状出入、八代洲河岸野沢様川瀬様おかな殿井上弥兵衛殿御内方江おきさ道中無滞着致、其上拜領ものいたし候、右之礼申遣入、神田橋梅山様鉄砲洲瀧川様御娘子おやち殿へも文にて御とゞ様御願ひの事頼遣入、幾村殿江おきさ事神田橋富沢殿まで御頼被下候御礼文上ル、おとゑ殿江も右同断文出入、今日御留守に付九つ時より御庭江参り御庭残らず致拜見御本丸之外御門^ののぞき致拜見候所、すさまじき高き御山にて所々之山々海も見江殊之外能き見はらし二而御座候、夫^の西の丸御茶屋にて御酒戴き御本丸の左り之方江参り、よほど山をおり候て大木の椎乃木御座候而椎^の美ひるひ七時過二歸り候、惣而御庭乃紅葉蔦一面に殊之外よふ染し申候、井上伊織殿江義鶴^乃乃文にて御とゞ様御願ひの事小源太殿迄頼遣入

一 九月廿四日、今日八重崎殿御部屋二而香利申候
 一 同廿五日、今日きのゑ二付奥にて香利申候

一 同廿六日、八重崎殿お元殿お浅殿四人二而寛待いたし候、夜九時前^に餘程風立申候

一 同廿八日、江戸表^を九月十三日出之御用飛脚^{到着}、急出候二付追分江者しらせ不申候由、右二付追分^を八書状参り不申、おとゑ殿^を文にておきさ事九月十日二神田橋酒井左衛門尉様江御目見江二参り候よし仰下され候

九月晦日 雨

十月朔日^を 快晴

同 十一日迄

一 十月二日、江戸表江御用飛脚出入、追分江も状遣入并松茸少々遣候、弥三郎千蔵江者御庭の椎の実少々遣申候、川瀬様江しゐのみ道^後護^のもくさ遣し候、幾村殿おとゑ様おさい殿江も松茸少々^を上げ候

一 同四日、八重崎殿御部屋二て香利申候

一 同六日、江戸表^を九月十九日出之御飛脚今日^{到着}至着いたし候、追分^を十一日、十四日兩日の日附乃書状来ル、おきさ事富沢殿御部屋迄おりせ同道二て上り、御目見も相済随分御首尾八能候得共、御人揃ひ居候二付よけい^{余計}の御人は御か^抱

へ被遊かたく候二付、まづ御^座やとひ之つもり二てさし^{差遣}おかれ候趣二富沢殿仰られ候由、おきさ事又々八代すかし江逗留二上り候つものよし申来ル、御老中松平右京太夫様御殿中二而御頓死被成候由書状二申来り候

一 同七日、今日御定日二付江戸表江御飛脚出ル、追分江も書状出入、半切紙上ル、藤五郎様御娘江文上ル、其外川瀬殿江文かつらおし花上ル、おとゑ殿江おきさ礼申遣入、幾村様江も右同断、お小五江もかつら遣入、立野殿浦野殿江もかつら上ル、おとみ^の仲間江干鯉五枚お哥殿初^に遣候、御短冊式枚戴キ申候

一 同九日、御留守二付奥二而香利申候

一 同十一日、江戸表九月廿八日出候御用飛脚今日^{到着}至着いたし、追分^をも九月廿二日、同廿六日日附の状来ル、おきさ事八代洲河岸^を下り、神田橋より御好乃浄^{掃除}り覚候様二申来候二付、すぐに文字菊方江稽古二参候よし申来ル、八代洲岸より戴き候小袖色々書付参り候

一 茂姫様御事九月廿三日言橋御屋舗より御本丸江御わたまし被遊、夫^をすく二西丸江入らせられ候由、茂姫君様与可奉称由被仰出候段追分^を文二て申越候、おきさ^もも文来ル、おとゑ殿お小五^を先達而乃返事来ル、おませ様^を神田明神祭礼乃番附来ル

十月十二日

曇ル
夜二入雨

一 今日御^座つや致し候

同 十三日^を

同 十五日迄

快晴

一 十月十三日八重崎様御部屋二而香利申候

同 十六日 雨夕方^を快晴

一 今日御表二て御能有之五時^に始ル、拜見仰付られ候、御番組左之通り

先右衛門 千助
 一 蟻通 新助
 六兵衛 多三次 和多右衛門
 佐五兵衛 市八

萩大名 周甫 左市 次右衛門
 左源次
 一 籓 千助 貞治 小右衛門
 間 白山 平次
 間 柑子 助五郎 左市
 一 羽衣 千助 新之丞 和田右衛門
 甚九郎 文左衛門
 新助
 酢はしかみ 左市 次右衛門
 左源次
 一 放下僧 新助 多三次 次右衛門
 文嘉 周佐
 アシライ 周甫
 しびれ 周甫 左市
 喜蔵
 一 鷓鴣 千助 貞次 喜代八
 七之丞 小右衛門
 六兵衛
 間 左市
 次右衛門 周甫
 因幡堂

四郎三郎 喜右衛門
 一 葵上 千助 新之丞 藤次郎
 六兵衛 文嘉 周佐
 アシライ 左市
 いくゐ 左市 周軒 次右衛門
 ツレ 喜三兵衛 栄次
 兵太 金三郎
 佐七 新介 吉蔵 三五郎
 庄左衛門
 一 紅葉狩 千助
 弥三次 七兵衛 小右衛門
 末社 龜之丞
 甚七
 一 鉢木 千助
 左市 周甫
 左源太
 一 あこき 千助
 御祝儀 勝五郎
 次右衛門

十月十七日よ 快晴
 同 廿日迄

一 十月十八日、御猪狩二被為入猪式疋鹿拾三疋御取被遊候
 一 同十九日、御用飛脚出入、追分江も文遣ス、おとゑ殿江も文遣ス

十月廿一日 昼快晴
夜四時過らあられ降ル(霰)

同 廿二日ら 快晴
同 廿四日迄

一十月廿二日、江戸表ら当月五日之日附之御状(到)至着、おとゑ様おさい殿ら文来ル、此度は追分ら八状参り不申候由仰越され候、浦野様らびん(書)附式本白粉壹つ、お安より白粉壹つ(書)もらひ申候

一十月廿三日、御茶屋江参候、石手川を通り田乃中を通り、吟松庵と申御茶屋 定勝様御二代目乃太守様勝山様御隠居被遊候所にて唐土金山寺之移し之由二御座候、御数寄屋も御座候、安心堂と申二地藏堂并十王御座候、観音堂二唐佛之立像之正観音御座候、右之御茶屋にて支度戴き夫ら式町程脇竹乃御茶屋江参候、御床柱御床ぶち欄間御障子こし御縁頼御天井も竹二而こしら申候御茶屋にて御座候、吟松庵ら竹の御茶屋まで三町程御座候、大昔は一構之由今は両御茶屋斗にて不残田畑二成申候、御かまへ之内莖理ノ丈式文餘の杉の木御座候、竹之御茶屋向ふ二京都清水観音の移しだるま堂あり、かさ茶屋と申候も少し高き山にて御座候、いろは茶屋の跡あり帰り二繁多寺江参り候、天台宗本尊正観音弘法大師二御座候、石手寺江参候、真言宗本尊大如来衛門三郎が持生石拜し縁記承候、拾二社権現の社あり、道護江廻り帰り候、暮方故八幡宮江は参詣いたさず六半時頃帰申候、此御地此節大風はやり替ルく風引申候

十月廿五日 雨
同 廿六日ら 快晴
同 廿九日迄

一十月廿六日、八重崎殿御部屋にて香利申候
一同廿八日、太守様御風氣二而餘程御ねつ被為有候
一同廿九日、御風氣二付御ねつ致申候
十一月朔日ら 快晴
同 十二日迄

一十一月二日、明六半時ら餘程風立申候、今日御切府御仕着せ代戴き申候

一同四日、江戸表江御定日の御飛脚出ル、追分江も文遣入、御きりふ初御歳暮鏡餅御祝ひ申上候二付、金子三百疋一所二いたし御両親様江さし上候、塩鯛もあけ候、助五郎様勝次郎様おきさ江も文遣し申候、九月むしん無良無良かけ金壹両拾刃七分五厘之所江壹両壹分上け、残り八来春二月むしん無良無良之節迄幾むら様御預り被下やう二御頼申候段、おとゑ様迄申上候、三しま様二金貳両御借り申候所、此節壹両御返し残り壹両は春御返し申上候積り二御やくそく束束いたし置候、追分江金壹両遣し右者地黒飛色縮緬三つの小袖利上げ二遣申候、河瀬殿江文并塩鯛上げ申候

一十一月五日、夜奥二而香利申候

一同六日、江戸表ら十月十九日出之御飛脚(到)至着、追分らも御両親様始兄弟衆不残ら書状来ル、十月十一日、同十七日日附之書状二御座候、皆々替り事御座なく候由、九月廿九日二おきさ鉄砲洲おるせ方らむかひ二参り上り候所、早速 西尾山城守様江初而御目見被仰付淨り被仰付候所、殊之外能出来候よし二て大殿様御部屋様江申上御越し被成候様二可致由之御意二て仰しんせられ、翌日御部屋様被為入、其夜御馳走として儀太夫ふし二て御人形御座候所、三段目江おきさ豊後(節)二山崎与次兵衛榭落し之段御人形二て語りよふ出来候由、六日逗留いたしおり 山城守様(目録)御もくろく式百疋 御姫様(非)縮緬(目録)反 御幸様ら御細工もの 大殿様乃御部屋様ら御細工もの、瀧川殿よりもくろく百疋、其外皆々様らさ(細工)みくものなど貰ひ候由、また八代洲河岸江おきさ召させられ十月廿七日二上り候由、勝次郎様袖嶋さ反式分式朱二(書)はるるひ、おとゑ殿御頼御取被成候由、壹反切裏地も御取候よし、松茸乃礼も申参候

一新吉原九月晦日夜大雨二て伏見町ら焼出し中の町東側残らず江戸町通り大門まで焼候由、おるせらも文来ル、おるせらおきさ江黒繻子帯遣し候由、おきさら着代銀子貰ひ申候、勝次郎様ら柱かくし壹枚入交り番附け貰ひ申候、おとゑ様ら文来ル、油三百銅来ル、竹内平三郎様西丸亀井坊ト申二被仰付髪をそり坊主二成、一ヶ年正月四月十七日紅葉山 御宮江被為成候節斗の御供二

て高も相増し名八竹内長悦下改り候由申来り候、松平相模守様被遊候拾五評之勝負附けおきさ戴キ候由にて見せに参候二付 御前江御覽二入申候

十一月九日、殊之外風強引込(勢)つ有之難儀いたし引込申候

一同十日順的殿薬給申候

一同十一日、御用飛脚出ル、追分江も状遣ス、おるせ江も状出ス、風氣にて引込おり候二付、おとゑ様江は口上書之様二いたし文遣候、瀧川殿おやち殿江礼文遣候

一同十二日、江戸表ハ十月廿七日出之御飛脚今日至着(到)、追分ハも十月廿五日、

同廿六日日附之書状来ル、皆々様替り事なし、十月廿三日朝五時より雪ふり出し九時ハ雨二成候由、おきさ事八代すかし江上り候所 殿様ハ丹後嶋吉反戴候よし、其外御年寄衆始ハ左衛門尉様江上り候節御みや二相成候品被下候よし申参候、浅草江 若君様被為入観音開帳 御免被 仰出、十一月五日迄日数十五日之開帳、千川上水も段々出来水も懸り候得共、あんはる(案配)不宜度々堀直し候由、おきさハも文参候、おさハも様ハも文来ル、おとゑ殿五夜泊りにて御下り被成候由、江戸表茂殊之外風はやり候由申来候

十一月十三日雨、十一月十四日ハ十八日迄快晴

十一月十四日、今日者餘程風気快方二罷成候

一同十六日ハ出勤いたし候

一御内々二而御寝巻御小袖ヱつ御襦袢褌つ戴申候、尤十八日二いたゞき申候

十一月十九日 雨

一十八日乃日附二而江戸表江御飛脚出ス、宿江も書状遣し御寝巻御襦袢戴き候由吹聴申遣候、おとゑ殿おさい殿へも文上げ申候

同 廿日ハ

同 廿一日迄 晴天

一十一月廿日、御留守二而御表御庭江参り橋かふじ椎の実おひたゞしくひろひ申候

一十一月廿一日、八重崎殿御部屋二而香利申候

十一月廿二日 曇八時ハあられ降申候

一同廿二日、今朝五時寒二入八重崎様御部屋二て香利申候

同 廿三日ハ

同 廿六日迄

快晴

一十一月廿四日、道護(後)二ノ湯江参り入湯いたし候、殊之外宜敷三度入申候、かつまや新六と申町人方二而弁当つかひ夫ハ湯神社江参、八幡宮江も参詣致候、一乃湯始メ不残見物いたし候

一同廿六日、今日灸治いたし候、江戸表ハ当月五日御定日御飛脚着致候、追分ハ十月廿九日并十一月二日の日附書状至来(到)、皆々替り事なし、おきさ十一月

九日二神田橋江上り候つもり之由申来ル、十月廿六日夜六半時頃ハ四時過迄江戸中家なりいたし障子江ひゞけ候音かたくいたし、尤至而カス力成る音二候得共、一時半程も家なりいたし 御城などは別而ひゞき強御寝之御間替り候程之由、西丸大奥二而者御立除乃御用意可致旨大奥向之役人中江御内々御対談にも御座候由、尤表向江八右様之被仰渡無之候由、其夜五時過光りもの通り候由申来ル、相模守様ハおきさ戴候よしにて江戸宗匠拾五評二而式百句ハ外二廿二句書加江詠草御とハ様御写し被遊被遣候二付則 太守様江入御覽申候、顔見せ之番附并鉄砲洲二而義太夫狂言乃番附参申候、おりせ様ハ文来ル、下谷之板倉撰津守様御用人之御子息之方江縁組相談極り、十一月廿六日頃ハ先方江御越し之由申参候、おるせ方江先達而御庭之桜花のおし絵をいたし遣候得者、返事二哥を数々読候て差越し候、左之通り

みまゑ乃桜とて殊に色あるをおし花二なし給ひて給りけること乃いとうれしさいはん方なければまたいハしらぬこと乃葉をよみてまいらせける

類せ女

色に香に君かあたり乃花なれば千とせ乃はるをかけて咲らん

浅からぬ心乃花と見し花といつれ色香のあたしとやせん

海山を越して色香乃つろろわでこハにも見える花乃おもかけ

日数さへおもふも遠きあつま路に盛乃花乃色もめつらし

木乃もとはさぞと色香乃おもわれて元ならぬ花にちかまさりせし

もみちさへ残らぬ頃をいつとてか春とやいわん花を見すらし

右之通おるせ方申越し候、おとゑ殿おさい殿文来ル、おきさ事六日二
 あたこの下江上り二夜とまり幾村様御着代金貳百足并おとゑ殿おさい殿
 と湯かた地、立野殿浦野殿はな紙、おとみ始おるては尺長貫申候よし、お
 とゑ殿仰下され候きの多子待いたし候

十一月廿七日 雨、夜二人あられ降ル

一 御鷹野二被為人御帰りを御物見にて見上げ申候

十一月廿八日 朝雪
 昼は晴

同 廿九日 晴天

同 晦日迄

十二月朔日 雨

一 十二月朔日、御用飛脚出ル、寒中見舞追分江も文出ス、おきさ神田橋江上り
 候二付幾村様御始御礼文上ル、田安梅山様お小五江も文出ス、川瀬様おかね
 様へも文にて礼申遣ス、おるせおきさ江も文出ス、相沢御お兄様寒中見廻文
 遣ス、存古様江ゑり巻上げ申候

秋乃末つかた御庭乃桜春かと思ふ斗りて咲ぬるこそいと珍しけれかゝる
 花をひとりあた二見んもほみなく古里乃妹乃方江送りぬればこのふ歎
 いと珍らしく見給ふとて哥をよみて給りぬれと返事せんも道うとければ
 いかにせん

〔朱書〕 浅からぬ人乃詠の言乃葉に送りし花乃色も増れる
 右之通おるせ方江かへし遣ス

十二月二日 雨

一 今日奥にて香利申候

同 三日 曇

一 今日、八重崎様御部屋にて香利申候、ばん物二くみ二見香利御座候

同 四日 快晴

同 十一日迄

一 十二月五日昼時前少々雪ふり早速上ル、道護江入湯いたし候、一度入夫はか

ぢまや江参り弁当いたゞき又夫入湯いたし七時過帰申候、一ノ湯いまた
 太守様湯入二付此度も二ノ湯江入申候、御鷹野鶴戴牛候、御かゝ様江上け
 可申とすく二味嘈漬いたし置候、八重崎様小包数々御もらる申候

一 十二月九日七時過雪少々ふり六時頃止ミ申候、江戸表へ御定日の御飛脚出
 ス、宿江歳暮御祝儀文上ル、戴候のり入紙言帖半紙三帖ろふそく鶴の肉上ル、
 おるせおきさ江文遣不申おとゑ殿おさい殿江文上ル、美髯丹百目今日給へ
 申候

十二月十二日

同 十三日迄

一 十二月十三日今日御煤掃御祝儀御座候

十二月十四日 快晴

同 廿二日迄

一 十二月十四日、順の殿江葉礼式分式朱遣し道圓殿江大半紙三束遣候

一 同十七日道護江参二乃湯江入申候

一 同十八日奥二而自読哥取申候

一 十二月十九日江戸表は十二月二日飛脚着、宿は十一月十七日、十八日、晦日、

十二月二日右四度之書状一所二今日着いたし、皆々相替儀無之、おきさ事八
 代洲河岸江御暇乞二参り御目錄式百足戴き候よし、おきさ事神田橋江上り御
 広敷小間遣ひ勤居候よし戸川様御部屋にて御世話被成被下候よし、おるせ事

御幸様御帯とき御祝ひ二付緋ちりめん御小そ戴候よし、おりせ殿霜月廿六
 日御婚調有之候よし、おるせ方おりせ殿江郡内しま袷并細工もの品々折二
 入上候由おきさ媚茶ふとりあわせ上げ候よし、おきさ京都にて調ひ候白
 粉貰ひ申候、追分ごまめ勝次郎様より干菓子もらる申候、おりせ殿御出之
 所板倉撰津守様御家中近藤安兵衛殿と申候よし、御とゞ様色々珍敷御書付
 共被下置候、先達而上げ候歳暮御祝儀鏡代御切米初尾上げ候御返事被遣候、
 川瀬様塩鯛上げ候返事被遣候、新海苔とはこね草被下、おかね殿より白粉
 被下おとゑ殿おさい様文被遣候、先達而追分江申遣し置候白粉四つ来小源
 太様より先達而乃返事来ル、御とゞ様御願ひ事油断なく心かけ候由申来ル

一平野小源太様より松山冬枯乃気色筆二も及び不申とかねて御耳のよしにて

「^(朱書)松山や江戸へ土産の冬気色」

御帰りの後

「^(朱書)聞たしとのみ松山や冬けしき」

右之発句小源太殿より参り候、江戸表十一月三日初雪ふり候よし申来ル、おとみ殿おりに迄ねつ之半切三百枚兩人江被下候、おとみ殿茶とせんへい兩人江被下候、染野様よりや^(楊枝)ふし丈長少々御もらぬ申候、夜五時少々地震入申候

一十二月廿日、今晚節分二付 御目見被仰付御酒御吸もの戴き申候

十二月廿三日

雪少つゝ
終日ふり申候

一十二月廿三日、江戸表江寄状出追分江文上ル、錦こ手前にて干候大根乃切干三分札なまくさ二添助五郎様初メ兄弟衆へ文遣し申候、おるせ江道^(後)湯さらし之もくさ遣し申候、小源太様江文遣し御表御庭乃薦ヲ中へ入しほりき、外二山吹かたね乃しほりきつ上げ申候、神田橋富沢様戸川様江もおきさ御世話被成候御礼文遣候、河せ様へも礼文上ル、幾村様御初メ文上ル、おとゑ様おいい殿江文あげ百通入かわこきつ私帰り候迄御預り置被下候様二申上ル、右かわこ之内二幾むら様御初皆々様江上げ候紙にて御座候、お哥殿お元殿より半切五百枚つゝ御預り右之かわこ江入遣申候、御右筆間江兩人方干かぶ上候、お富様初半切賞候返事遣ス、お富江兩人より枝柿遣し御使番兩人よりかつら遣候、弥三郎様千蔵様江御下乃ぎ^(牛皮)うひ^(アヌ)給戴き候まゝ遣申候
一道^(後)護湯江参候、帰りかけ二稽古二いたし候香炉きつ調ひ申候

十二月廿四日

快晴

同 廿九日迄

一十二月廿四日、今日髪すまし申候、夜の内雪一寸程つもり申候、奥にて香利申候

一十二月廿八日、今日七時過る雨ふり申候、歳暮として銀子五両戴き申候

一十二月廿九日、今日江戸表江寄状出ス、追分江も文出ス、此度は兄弟衆へ文

出し不申候、御両親様始枝柿上げ申候、奥二而香利申候
住吉香十炷香小鳥香御座候、殊之外静力成る年越しにて風もなく暖かなる方
二御座候

天明貳寅歳

正月元日

同 二日迄

一正月元日、今日御目見被 仰付候

同 三日

同 四日迄

一同日、暮時より雨止三ヶ月様拜し申候

同 十六日迄

快晴

一同五日、御出初二付御物見江参り見上げ申候、夫より道^(後)護湯江参り沙^(妙)王院宅江参お哥殿初鼻紙三束遣申候、江戸表江三日乃日付にて明日御飛脚出立致候由、御状箱御表江出ス、御両親様御始兄弟衆へ年始之文出ス、金百疋御両親様初メ兄弟衆へ御年玉二あげ申候、おるせおきさ江御国乃枝柿遣し、おきさ江外二かつら少々遣ス、追分江塩鯨上げ申候、河瀬様戸川殿お小五おりせ殿小源太殿御おは様方藤五郎様へも年始之文上申候、幾むら殿初皆々様へも年始文上げ申候
一道^(後)護湯江参りかけ恵方参、味酒大明神江参詣いたし、湯の帰二湯神社八幡宮江も参詣いたし候

正月六日

快晴

一正月六日、御年越二付御目見被仰付候

一正月七日、今日八少々風立申候、御目見被仰付候

一正月十日、江戸表より十二月廿四日御目附之寄状来ル、追分より状来ル、おきさ

十二月十一日神田橋御三之間二被召出候由申来ル、江戸表何之相替義なく助五郎様より干大根被下候、勝蔵様より浅草海苔被下、おとゑ殿おさい殿兩人よりか

つ(髪師)ふし半切被下候、お梅殿御房様を半切御貰ひ申候

一 正月十一日、西丸乃御庭江被為人何れも参御花見御座候、小角殿亭主役にて御吸物御で(田楽)んかく被召上御下戴き暮合過御帰被遊、御跡しまひ何れも帰申候、西之丸御庭梅盛りにて山々乃気色(殊)ことの外宜候

一同十二日、今日の御日附にて御用飛脚来ル、十五日出入、追分江も書状遣入、おませ殿江浅草(海老)のり乃礼文遣入、幾むら殿御初御右筆間江おとせ召出され候御礼文出入、其外富沢殿戸川殿河瀬殿おかな殿右同断文出入、おるせ江十六桜おし花二いたし遣申候、奥にて香利申き始メ故子の日香古今香小鳥香御座候

一同十四日、江戸表を極月廿九日御日付御飛脚(到)至着、追分を極月廿六日日附状来ル、何之替る事なし、いまた御内定も出来不申候二付、亦々神田ばし梅山殿へ頼遣申候

助五郎様御事長崎奉行久世丹後守様御内西川東吾殿世話にて当分之内丹後守様江御越し被成候由申来ル、勝次郎様を新吉原乃甘露梅態々調ひ候而此方迄被差越候、おいね殿より塩引鮭御も(買)らぬ申候、御右筆間を文参候、御年越二付 御目見被仰付候

拾六桜者

豫州松山和気郡山越村龍穩寺二御座候

一 正月十五日、今日一昨十三日日附にて江戸表へ御飛脚出ル、十四日着致候返事出入、神田橋梅山様江文外二道護(後)乃もくさ添候而遣候、今日御福引にて杉原紙拾束大豆小俵二而舌俵戴キ申候

一同十六日道護(後)乃湯江参り帰候而奥二而香利申候

正月十七日 雨昼時過る止ム
夜中餘程乃風

正月十八日 快晴

同 廿三日迄

一 正月十八日、道護(後)一乃湯江参り候
一同十九日、今日も道護(後)乃湯江参申候

一同廿日、今日も道護(後)の湯江参り帰りかけ二芹摘候て部屋にて吸もの二いたし給へ申候、三月十三日出立致候様二今日被仰付候

一 正月廿一日、道護(後)の湯江参り、今日入湯仕廻ひ二付妙王院をうとんふるまひ申候、福引二而御多葉粉入戴き申候、江戸表を当月五日日附之御飛脚(到)至着、御右筆間を御文被下大小やふし指式ツ、幾村様より白粉式ツ、立野殿浦野殿を(買)びん付式本もとゆ(元結)ひ三ツ、田安富沢殿梅山殿を筆五対墨一挺御も(買)らぬ申候、染野殿より半切百枚御も(買)らひ申候

一 正月廿二日、今日格別之思召ヲ以御支度金五両戴申候

正月廿四日 雨

一同廿四日、今日部屋にて香利申候

正月廿五日 快晴

同 晦日迄

一同廿五日今日御給金戴申候、御福引にて万歳扇子戴申候、三しま様江金巻両御返し申候

一 正月廿六日御鷹野御留守二付二乃丸御殿拜見いたし、二乃丸御奥にて御酒御肴戴き申候

一 正月廿七日七時過る御表御庭江被為人、御で(田楽)んかく御吸もの御酒戴五時御帰り被遊、何れも御跡より帰り申候

一 正月廿八日御表御庭江参り(土筆)摘申候、御支度金四両戴き申候

一 正月廿九日、今日廿七日之日附にて御用飛脚出立追分江も書状出入、金子六両くめん之品請候様申遣御切初尾銀三刃程あげ申候、御かゝ様江鶴の肉道護(後)ゆさらし乃手ぬ(垢)ぐる上げ申候、勝次郎様へ筆式対墨一丁上げ其外へ八文あげ不申候、田安たか殿梅山殿江文上げ筆乃礼申上候、梅山殿お小五江おとせ御奉公人江被召出候御礼申上候、御右筆間江文あげ候、おとゑ様へ金言両上ル、右は式分は部屋のもの取替式分は無尽かけ金二上ル

一 正月晦日、今日初而灸治いたし候

二月朔日 朝六時過雷雨夫を大風

一 二月朔日雨止三御表御庭江参り(土筆)つ(土筆)くし(土筆)芹なと摘申候、昼八時前二少々大降り

申候、夜中大風

二月二日

快晴

同日迄

二月二日昼七時過り大風吹申候、大廻し之長持つめ申候、夜中少々雷大風にて雪も少しふり申候

二月三日、今日大風昼過り止、今日呉服之間御すけ二出申候、八重崎様御部屋二而香利申候、はな江金吉分遣申候

二月四日、江戸表は正月十六日附乃御飛脚至着、追分は年始之文来ル、御年玉としてするめ塩かつほゆつし絹糸御貫申候、おるせは年始文年玉唐はさみ一丁白粉貫申候、勝二郎様より文来ル、江戸表大晦日夜中雪降元日四時

過迄ふり、夫は天気二成候得共大雪二而風乃吹廻し之所にては三尺程もつもり平場にて言尺程積り候由、正月十二日夜八時頃大雷二而所々江落候由江戸より

申来ル、御右筆間と文并おや乃も文来ル、浅草海苔兩人江被下候、神田橋梅山殿鉄砲洲おるせ返事来ル

二月五日

夜中雨

今日御表二而御能御座候而拜見被仰付候

御番組

四郎三郎 六兵衛

一難波 条助 新助 多三次 和田右衛門

栄治 千介 市右衛門 文左衛門

間 治右衛門

福の神 治右衛門 周軒

佐七 先右衛門 平作

一清経

千助 貞次 周佐

勘九郎

花あらしい 勝五郎 治右衛門

左源次

一半部 新助 新之丞 市八

間 周南 佐五郎

文蔵 周南 次右衛門

喜蔵 佐七 新平 藤次郎

一羅生門 千助 忠次郎 文左衛門

間 勝五郎

不聞座頭 周南 次右衛門 勝五郎

一黒塚 左源次 千助 多三次 藤次郎

間 六兵衛 市右衛門 周佐

村山伏 左市 周南

一熊坂 喜蔵 千助 吉蔵 三五郎

間 平作 白山 小右衛門

富士松 左市 周南

先右衛門 千助
 自山
 一春日龍神 六兵衛
 新之丞 和多右衛門
 七之丞 小右衛門

附 間 周軒

祝言

二月六日 快晴
 同 十二日迄

二月六日御留守故西丸御庭江參摘草致候
 一同七日御飛脚出ル、追分江木綿五反、御福引にて戴候豆御具足の餅上げ候、
 右木綿八みやけにて候得共御勝手二直与存先江上げ候、水仙乃根も上げ候、
 是は西丸御庭之水仙にて御座候、木綿太り吉反媚茶二染御頼追分江遣入、貰
 候る(編獨)ふそく崩半切上候、勝次郎殿へのり入三帖遣候、おるせ江返事遣、此度
 は助五郎殿おとせ江は文遣不申候
 一御右筆間江文并あま海苔上候、立野殿浦野殿江柿唐まん(饅頭)ちう上候、おや乃江
 同断、お梅殿お房殿お哥殿始柿上げ申候
 一二月八日、七日乃御日附にて今日御飛脚出ル
 一同十日、御庭江摘草取二參、御本丸下江わらび取二參候所、漸式三本取候而
 暮六時過歸申候

二月十三日 朝雨
 昼時は天気大風吹申候
 同 十四日 朝少々雪降
 昼は天気
 同 十五日 快晴
 同 廿日迄

二月十七日江戸表は当月二日出御飛脚(到)至着、追分より正月十八日日附書状来

ル、麻芋梅干来ル、助五郎殿勝二郎殿は状来ル、助五郎殿は御洗米被下候、
 おきさよりまきせん(巻煎餅)へい(巻)もらひ申候、戸川様より京都乃ちりめんざこ御貰ひ
 申候、御右筆間はまきせん(巻煎餅)へい(巻)もらひ申候
 二月廿日江戸表江御飛脚出ル、追分へも書状遣入、助五郎殿おとせ江返事遣
 入、鯛乃味噌漬少々上げ申候、河瀬殿并御右筆間江文上ル

二月廿一日 雨
 同 廿二日 快晴

二月廿二日、今日道護(後)八幡江参詣いたし一乃湯江入申候、殊之外花盛桃(桜)さく
 ら咲揃ひ申候

同 廿三日 雨
 同 廿四日 曇昼は天気

二月廿四日、今日御表御庭江御供にて参り、わらひ沢山二取 御前江もさし
 上候

二月廿五日 快晴
 同 廿八日迄

二月廿六日吟松庵江参り帰りかけ竹の御茶屋江参り申候、江戸表は御飛脚(到)至
 着、追分はも書状参候、替る事御座なく候、当正月廿五日夜五時雨ふり候最
 中、水戸様御下屋敷にて五拾間程乃長屋一陣焼申候、大雨サジクヲ流し候得
 共消兼候由、其夜九時は大雪にて翌廿六日昼八時迄ふり候由、吹き廻し之所
 二ては四尺程も積り候よし、長崎土産之由にて唐にて製し候カルメラト申入
 菓子少し追分は被遣候

二月廿七日西丸御庭二而御花見あらせられ御供いたし暮方二歸申候、御茶屋
 にて御(田樂)てんかく御吸もの御(能)すしなど戴き申候

二月廿九日 雨
 同 晦日 雨

二月晦日爰治いたし候、義鶴江文并御初尾五刃札遣申候

三月朔日 雨
 暮時は天気

一 三月朔日御表御庭江御供にて参、御山にてわらひ沢山三取 御前江もさし上
皆々も戴き申候

三月二日お

快晴

同 四日迄

一 三月二日、今日吉田乃濱江汐干ニ参り、夫ら船にてさしま江参、かき（牡蠣）其外
色々貝（貝）ひろひ申候、御船頭八さしゐなまこた（鱈）石かれゐなとひろひ申候
一同三日、西丸御庭江御供にて参り摘草いたし、御庭江ウサギ出小角殿御鉄砲
にて御打留被成候由二て大さ（鱈）わぎに成候所、ウサギ八（鱈）に（鱈）け申候

三月五日

雨

一 三月五日、今日御定日故御飛脚出入、追分へも書状遣入、白袖吉反媚茶二染
二遣入、干わらひ染の殿江上ル、江戸表（二）月廿二日御目附にて御飛脚着、
右二付此御地（一）之御飛脚一日延七日出立、追分（一）状来ル、替ル事なし、御
か（一）様二月十七日神田橋へ御上り被遊候よし、二月十七日、同十九日日附之
書状来ル、先達而上候金子其外品々之御請取参候、助五郎殿（一）状来ル、おる
せ（一）も状来ル

三月六日お

快晴

同 七日迄

一 三月六日、今日昨日着致候御状之返事出入、弥三郎殿千蔵殿豊吉殿江塩干二
ひろひ候貝遣申候

同 八日

雨

三月十日お

快晴

同 十一日迄

一 三月十日おかな殿（楊枝）やうし（楊枝）毒消うちわ（扇）本もら（扇）ひ申候

一 三月十一日 太守様御機嫌能朝五時二御発駕被遊候、御立前二奥江被為入御
目見被仰付候、御跡ふき二付御酒御肴戴き候、奥附の衆江初御哥殿初（一）硯蓋
もの御酒御肴進申候、昼御膳（一）御膳戴き申候

一 御注進御飛脚出候二付追分江も状出入、弥明後十三日出立致候段申上候、御
右筆間御初め仲（一）間衆内江文出入、御内々二而御寝巻并御襦（袴）伴戴き申候

三月十二日 雨

一 三月十二日奥附の衆（一）御酒の肴出し夜二入候迄何れ茂打寄御酒給へ申候

三月十三日お

快晴

同 十六日迄

一 三月十三日、今朝四時二三丸御殿出立、三津の濱（一）乗船致候筈之処、汐合ひ
悪敷高濱御茶屋二而弁当つかゝ九時過二高濱（一）乗船いたし、夜四時前迄二拾
式里程参り 松平安藝守様御領分廣島之内み（御手洗）たらひと申所二滞船いたし候、
私事駕籠気にて八町縄手と申所高濱迄かちにて参申候、附添の人江逢ひ申
候、乗船いたしすくにふせり申候

一 三月十四日、朝六時過（一）出船いたし、八半時ころ阿部伊豫守様御領分備後之
福山之内因嶋と申所迄十三里程参り汐待いたし、七時過（一）出舟いたし高見と
申所迄拾里程参四時過二滞船

一 三月十五日、今朝六時二出船、五ツ時頃二讃岐の内田渡（多度）乃津迄式里程参り湊
江船附讃岐の金毘羅江参詣いたし候、御山乃下茶屋二而支度いたし暮方に帰
申候、汐待致し夜四時過頃出船致明（一）ケ六時迄二七里程参り備前乃国之内日比
と申所二滞船いたし候、讃岐金毘羅江参詣之節京極寺岐守様御城下通り京極
能登守様御城見ゆる、金毘羅参詣致候、左り之方に十一面觀世音有り、此御
堂に色々額あり、田渡（多度）乃津（多度）金毘羅江五拾町壱里二して三里帰り二善通寺江
参詣いたし候、弘法大師御（首）そ（首）たち被遊候所之由

一 三月十六日、昼九時過出船八里程参り八半時ころ備前国之内牛窓二滞船、風
悪敷故風待申候、此所湊あり

三月十七日

昼天気

夜雨

一 三月十七日牛窓二一夜滞船、昼過（一）餘程の風雨二て御座候

三月十八日お

快晴

同 十九日迄

一 三月十八日今朝明（一）け六時（一）出船順風にて六時ころ迄二拾壱里参り、左り之方
二赤穂乃御城見ゆる、播州之内室乃津に滞船酒并雅楽頭様御番所有、夕方舟

より上り町家二而居風呂二入ル、江戸浅草東光庵伝受そは切あり何も給へ申候、此所二本陣あり室の明神あり、灘口故ことの外賑成る所にて色々売もの等参候

一三月十九日風悪敷室二滞船

同廿日 快晴

一三月廿日、今日も滞船、香三組きゝ申候

三月廿一日

曇 暮時ら雨

一三月廿一日、今日も室二滞船

三月廿二日ら

快晴

同 廿四日迄

一三月廿二日明六時過出船、順風二而九里程参候俄二黒雲出風替り少々降出し早手にて御船頭大さわざ致候所、早速雨止ミ帆おろしこぎ候てやうく灘拾八里越暮方兵庫二滞舟、須摩摩明石乃間灘の瀬戸にて早手御座候所、船も大ゆれおそろしき事二御座候、殊之外船気候而難儀いたし度々もとし虫をきッはき申候、須摩摩通り候節御国許江乃御飛脚舟通り 太守様御機嫌能被為入候段窺候、十五日二灘御越被遊兵庫ら御上り被遊候筈之所、風悪敷やうく須摩摩御上り被遊候由、御召船乃いかり三丁すて尋候得共見江不申候由、御供船八隻吹流され江嶋二かゝり居候所、八隻共二集り、太守様廿三日大坂御屋敷御発駕被遊候由伺候、須摩摩通り候節須摩摩寺も見へあつ盛乃墓も見へ茶屋なとも見江申候、千鳥たくさん二居申候、兵庫沖二滞船いたし候間夜中ゆれ申候、はるかに湊見江申候

一三月廿三日明六時出船、拾里参り川口江七時過滞船

一三月廿四日朝四時過大坂安治あぢ川口ら川舟江乗替大坂御屋敷江昼時頃着、すぐに支度さし道とん堀芝居江御門前ら舟二乗参り四橋も見申候、角芝居藤川山吾座江参り見物いたし候、一ノ谷二葉軍記いたし大当り、江戸芝居二違ひ候事なし、しかし衣裳は江戸らすぐれてよろしく、尾山新七岡部の六弥太、直實相模か妻さかみ山下亀之丞、熊谷直實浅尾為十郎、ひやく百かぶ乃弥陀六中山来

助、菊乃前藤川山吾、太五平三榎大五郎、義経中山他蔵、浄留理留理八豊竹七太夫竹下織太夫同和哥太夫、三味せん竹沢伊三郎鶴沢源蔵、花道にうすへりしきさん核敷しき乃後に暖簾のれんかゝり茶屋の女子さん核敷しき江参り居、赤ま前垂へたれしめ前たれ乃紐殊ことの外ふとく、芝居乃切り二今日は是切り乃口上なし、切幕乃まゑ二口上にてすゑ乃太鼓が双方様江之いとま暇と申斗り御座候、殊之外おもしらく御座候、おそふ参候俣三段目熊谷乃語候段より二幕見申候、切り八太五平切腹之所、帰り二嶋の内河内屋作兵衛と申茶屋江参り、殊之外大なる茶屋にて中居皆々赤前垂だれ紐はう金こんちりめん編二いろく形乃御座候、もふるなど乃紐も御座候、支度いたし暮時舟二乗帰り申候、大坂御代官大屋四郎兵衛殿江御国のそふ素めんもくさ絵紙双し上候、追分江之書状も御頼差出候

三月廿五日

曇 七時ら雨

一三月廿五日大坂御屋敷出立、大屋四郎兵衛殿ら御人被下、昨日之御返事被下干菓子一折扇子御とゞ様江土産二いたし候様二と御賞ひ申候、追分よりの状式通御届け被下候、御屋形二乗り二里半程参り、この外風雨強く引舟なり不申、摂津之内一ツ家と申所江滞舟いたし候

三月廿六日

雨 八時ら快晴

一三月廿六日明六時ら出船、八幡乃宮右江見ゑ淀乃水車も見申候、廻り不申、八時過伏見江着、木津屋と申ス本陣江参湯つかめ、支度いたし七時過ら駕籠二て京都御屋しき江着いたし候、藤乃森稻荷前二て建場六時過御屋敷江着いたし候

三月廿七日ら

快晴

同 廿九日迄

一三月廿七日九時大佛江参詣、三十三間堂見物いたし清水江参帰り二祇園江参二間茶屋江寄休田楽など給へ申候、暮六時前帰申候、松平安藝守様御姫様見上げ申候

一三月廿八日四條芝居中山猪八座江見物二参候、けいせ傾城ひきやううちもふで第

一 八段目迄いたし候、中村富士郎陸乃はな二成(殊)ことの外宜切のまく七段目二道行御所模様みす乃追風と申浄(瑞穂)り座元中山猪八柏木左衛門、中村富士郎陸の花、中村のしお女三ノ宮、右三人にて所作浄(瑞穂)り春富士和国太夫同熊太夫、三味(線)せん春富士龜藏、尾上菊五郎此村隼人にて文月大臣となり、中村重藏將軍義直にて陸月大臣となり、花道両方乃出嶋原江参候所にて殊之外宜藤川八藏清見新助となり、仕打宜敷切二立もの、役者(發儀)ちきをいたし申候、六時過頃すく二御屋敷江帰申候、茶屋山下八百蔵座向平野屋下申又茶屋江参候、間宮孫四郎殿江御国之そ(素頼)ふめん一箱道護ゆさらし乃もくさ上げ申候、江戸追分江之書状御頼申上候

一 三月廿九日九時過天満宮江参詣、夫乃金閣寺江参り石不動開帳御座候而殊之外賑二御座候、金閣寺御庭も拜見、寺内二茶屋も御座候、池も餘程大きく御座候、夜五時前二帰り申候、織殿も見物いたし、御所之御門拜見御撰家方御屋敷通本尊弘法大師一刀三礼乃石不動悪摩か(降伏)ぶぶく釧もおがみ、金閣寺乃本尊三尊弥陀右之三(階)がいも下も天井楠乃一枚板にて不殘金みかきにて上二人王百一代後小松院乃御宸筆乃額御座候、太上天王御作鹿おん院殿の御木像拜三申候、金閣寺乃衣笠山見ゆる

四月朔日

快晴

同 九日まで

一 京都二條御門番之頭間宮孫四郎様乃今日御使被下からく梅の香梅干被下候
一 四月二日朝五時頃京都御屋敷出立、上下乃もの間違雇ひ人にて参候、三條乃橋通り白河はし通り白川橋は石也、昼休膳所本多様御城ミゆる、女川にて支度いたし候、暮六時頃石部江着、昼休いたし候、茶屋之向二近江乃水海ミゆる

一 四月三日朝五時前横田川舟渡、鏡山ミゆる、水口ト土山との間大野昼休、かにか坂通り鈴鹿山かちにて通り、坂乃下蕎麦屋江寄そは給へ風味殊之外宜敷、七半時過関江着

一 四月四日明六半時閑出立、昼休龜山乃御城下石薬師左り、杖突ま(頭)んちう給へ申候、風味よし、四日市にて支度いたし焼蛤給へ申候所風味至而よろしく、

七半時過頃桑名江着、松平筑前守様御初入庄野之内にて見上げ申候、御飛脚所迄江戸表之状出し置候

一 四月五日朝五時前桑名乃直二船二乗、順風二而九時頃宮江着、昼支度いたし、八時過鳴海江着いたし候、笠寺二観音乃開帳あり

一 四月六日明七時出立、昼休大濱そは切給殊之外風味よろしく、又藤川之内大はまくりと申所にて支度いたし、七時過御油江附やは(天作)き之橋汐干にて干あがり居申候

一 四月七日明七半時御油出立、荒井二而昼時御関所無滞相済、渡海いたし濱松江夜五時前着致候

一 四月八日紀伊中納言様濱松江八日御泊二付、本陣はやく明け七時過出立、天龍川渡り段々紀伊様御供廻り参候二付、和泉村百姓之内江参支度いたし御通り過迄休、八半時頃乃袋井迄参泊七時過着致候

一 四月九日明七時袋井出立、昼休日坂さよ乃中山かちにて、山下乃駕籠二乗大井川無滞越、大井川水すくなく深サ腰切二御座候

一 嶋田にて支度いたし、日坂乃入口にて江戸表追分の町人伊勢屋善吉と申もの、伊勢参宮致候由にて追分乃之状届け、相替候事無御座候よし申聞候

一 嶋田二休候内、江戸追分乃町人伊勢参宮之由にて又々追分乃之書状相届候二付、追分にて皆々替り候事もなく候哉之旨相尋候所、藤五郎様御不幸之由申聞候、藤枝宿江七時過着いたし候

四月十日

雨天

一 四月十日明六半時頃藤枝出立、阿部川越、昼休そは給へ申候、川前之建場二て阿部川餅給へ申候、駿河問屋場江江戸表より乃状参り居届候二付致拜見候、皆々替御事無御座候よし、浅草観音の境内二美濃国谷組之開帳御座候由、朔日観音の開帳も湯しま(島)天神地内二有之候よし、八百屋お七当年百年忌追善駒込圓浄寺にて有之役者参詣いたし、浅草之開帳へも日々吉原之女郎参詣いたし候由申来ル、右之書状三月廿五日乃日附にて御座候、七時過興津江着いたし候

四月十一日
同 十三日迄

快晴

一 四月十一日明六時半興津出立、昼休油井泊り吉原之所、御公家様方御泊り二付本陣さし合ひかん原宿江八時過着

一 四月十二日御公家様方御通り二付差合かん原二逗留

一 四月十三日かん原宿七時出立、富士川越し御公家様方向ふ被為入候二付吉原二て御待合茶屋二て小休いたし、夫かん柏原二て昼休、七半時頃沼津江着、御国江帰候御未目付泊り宿江参ル、おとゑ殿おさる殿より状来ル

四月十四日

雨
昼過かん大雨

一 四月十四日明七時過沼津宿出立、箱根かち、御関所無滞通りとふげにて昼休、雨強くふり出し候二付はだし二て歩行、小田原宿江七半時過着

四月十五日

快晴

同 十七日迄

一 四月十五日明六時半小田原宿出立、さ川無滞越し大磯二て昼休、鳴立沢西行の木像拝ミ申候、虎乃木像も見申候、西行諸国修行之節つかれ候杖五尺三寸乃長サ二てふし二ツ御座候、七時過藤沢へ着いたし候、追分かん藤沢問屋場迄状出し置候由二て問屋場かん相届け候、追分かん勝次郎様甚介供二つれられ藤沢宿江むかひ二御出早速逢ひ御両親様御初皆々様御機嫌能入らせられ候御様子窺ひ申候、御とく様へ小田原のかつほのたきさよの中山水あめ上げ申候、則勝次郎様甚介江御もたせあげ申候、愛宕之下江飛脚出立、弥十七日着致候段申遣入、追分江右同断申遣候

一 四月十六日明六時過藤沢宿出立致、程ヶ谷二而昼休、八つ時過川崎江着、途中にて又々勝次郎様御目二懸り、甚介江茂逢ひ申候

一 四月十七日明六時過川崎出立いたし、昼休品川二て暫く手間取九時過 御屋鋪江着いたし早速 御目見被仰付候

四月十八日

雨
少々雷

一 四月十八日、今日かん三日之内休足引被仰付候、追分かん使来ル、助八様かん御肴もらぬ申候、おとせかんも文来ル

四月十九日 快晴

一 四月十九日鉄砲洲おるせ方かん文来ル